平 成 23 年 度

研究紀要

第 8 号

秋田県立男鹿海洋高等学校

目　　次

（巻頭言）　・・・・・・・・・・・・・・・・校　長　工藤　正孝

Ⅰ　校内職員研修・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・研　修　部

1　第１回校内職員研修（教育法規Ⅰ・Ⅱおよび特別支援教育）

2　第２回校内職員研修（ブレインライティング法による学校活性化）

Ⅱ　校内研究授業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・研　修　部
1　第１回校内研究授業
2　第２回校内研究授業

Ⅲ　校外研修

1　１０年経験者研修・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・鎌田美津子

2　Ａ－23　高等学校新任学年主任研修講座・・・・・・・・・・・・・・加藤　範昭
・・・・・・・・・・・・・・船木　英也

3　Ｂ－10　高等学校英語科の授業スキルアップ・・・・・・・・・・・戸坂　圭子

4　Ｃ－26　ソーシャルスキルやエンカウンターの実践・・・・・・・・工藤　卓哉

5　Ｃ－27　教育相談に生かすカウンセリングの技法・・・・・・・・・工藤　卓哉

6　先進校視察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・大高　英俊

Ⅳ　水産フォーラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・船木　和則

Ⅴ　参考資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・船木　和則

編集後記・発行元・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・研　修　部

「研究する」ということ－武藤憲一先生のメッセージ－

校長　工　藤　正　孝

「研究する」ということは、結構骨が折れる。教員のほとんどは大学で専門的に経験してきているので、「研究とはおよそこのように進めればよい」程度は、教員なら誰でもできると期待されている。もちろん、レベルの高い研究ができる教員も多い。しかし、昨今自分の研究を、自分の時間を捻出して行うことは難しくなった。先生方に「ちゃんと専門的な研究をしなさい」などとは、なかなか言える状況にはないと私には感じられる。だからこそ、その中にあって地道に研究を進めている先生は、本当にすごいと思う。

「工藤さん、男鹿はいいところだよ。あそこには地球創世の歴史がそのまま見えるところがたくさんあるんだ。」

昨年秋、武藤先生のご自宅にお邪魔した。先生とは８年前に秋田東高校で１年間同職させていただき、スペース・イオ立ち上げ準備の中で私は先生の生き方、考え方に相当の影響を受けた。先生は校長職を終えて定年退職した後、教員指導のために総合教育センターに勤務された。その時、私は再び一緒に仕事をする機会を得た。生徒を見る眼の確かさと温かさはいつも私の心に大きく響いた。また、研究に対する厳しさと究めていく道筋の確かさは、多くの先生方に影響を与えた。現職である若い時分から、地理研究の大家でもあった。

「男鹿半島にはね岬端性（こうたんせい）という特色があり、その北側と南側で様々なものが違うんだよ。おもしろいところだよ。男鹿の子どもたちみんなに勉強させたいね。ジオパークにも認定されたし、今がチャンスだと思うよ。『男鹿学』という新しい分野を創ればいいね。」

お話しを伺いながら、３年間に亘る「目指せスペシャリスト」研究は地域に根ざした研究なので、『男鹿学』の内容に入ってくるだろうと、私はふと思った。そして、ふるさと教育との関連、キャリア教育との関連と、先生とのお話はとても具体的で夢のある方向へと進んでいった。

「ビジョンを描くこと」、先生のお話しの中には、いつもそのメッセージが入っている。ミッションを決めて、その達成に向けて具体的に対応策を考えて行く。手立て（選択肢）を三つ以上考える。達成の阻害要因を当初は考慮しない。ここでは、ミッション達成のための手立てをいくつ考え出せるかがポイントとなる。そして、実行の優先順位を決定する。この発想は、先生とのおつき合いの中から生まれた。

さて、「目指せスペシャリスト」研究は３年間の中で、先輩から後輩に受け継がれ、一つのまとまりをみた。生徒たちは先生の指導を受けて、「研究」を体験した。研究をすることによって、生徒は必ず変容する。実は、この「変容」が教育研究のテーマとなる。科学研究を進めながら、生徒の変容を丁寧に見取っていくことが、教育研究の意義となる。授業研究も同じである。学校における研究にはそこにもう一つの価値があり、それは生徒とともに研究を推進する「教師側の研究」としての大切な視点でもある。

「男鹿海洋高校には地域を育てる学校になってもらいたい。そして、海洋の出口の先が開けてくるといいね。」

先生は帰り際にエールを送ってくださった。微笑みながら優しく語りかけてくださったその言葉には、『本校の存在意義は何か』という強いメッセージがこめられていた。

Ⅰ　校内職員研修

平成２３年度　第１回校内職員研修　実施要項

１　目　　的　　新しい時代の教育の在り方について、「生徒指導」、「特別支援教育」を中心に法令・判例を交えながら講義・演習を行う。それによって「視座を変えてとらえる、視野を広げてみる、視点を変えてとらえる」等の力を養う。

２　期　　日　　平成２３年7月１９日（火）（野球応援の場合には延期）

３　会　　場　　情報処理室室

４　講　　師　　研修部主任　船木和則

５　日　　程　　１４：４０～１４：４５　校長あいさつ
１４：４５～１６：００　講義
１６：００～１６：１０　休憩
１６：１０～１６：４０　グループ演習
１６：４０～１６：５５　まとめ
１６：５５～１７：００　校長講評

６　内　　容　　講義：「教育法規Ⅰ・Ⅱ」「生徒指導」「特別支援教育」など
演習：Ｉｎｃｉｄｅｎｔ　ｐｒｏｃｅｓｓによるｃａｓｅ　ｓｔｕｄｙ
(平成２３年度教職員中央研修より)

７　演　習　班　　１A班　１B班（１年部）２A・２B班（２年部）３A・３B班（３年部）
※A・B班割は学年主任で決めて下さい。なお、武茂先生は１年部、猿田先生は２年部へ入って下さい。

８　携　行　品　　・鉛筆またはボールペン

８　そ　の　他　　・非常勤講師の方で参加希望がある場合は、船木までお知らせ下さい。。

内容及び資料についてはⅤ参考資料に掲載

平成２３年度　第２回校内職員研修　実施要項

１　目　　的　　組織マネジメントのＳＷＯＴ分析法を紹介し、全職員がグループ演習を通して学校活性化の方策を探り、今後の教育活動に役立てる。

２　期　　日　　平成２３年１０月３１日（月）（４０分短縮授業）

３　会　　場　　会議室

４　講　　師　　研修部主任　船木和則

５　日　　程　　１４：４０～１４：４５　校長あいさつ
１４：４５～１５：１５　講義
１５：１５～１５：４５　グループ演習(３分×６回)
１５：４５～１５：５５　休憩
１５：５５～１６：２５　グループ演習まとめ
１６：２５～１６：５５　グループ発表（１班５分)
１６：５５～１７：００　校長講評

６　内　　容　　講義：学校におけるＳＷＯＴ分析の紹介
演習：ブレインライティング法による活気のある学校づくり

７　演　習　班　　１グループ６人に分かれます。(後日配付)

８　携　行　品　　黒色ボールペン

８　そ　の　他　　非常勤講師の方で参加希望がある場合は、船木までお知らせ下さい。。

内容及び資料についてはⅤ参考資料に掲載

演習の進め方

① 発表者を決めておく。
② １枚の付箋紙に３分間で３つのアイディアを記入する。それをシートの最初１の空欄に、貼る。
③ ３分たったら、合図で全員一斉に、自分のシートを自分の左側の人に渡す。
④ 次に、自分の右側の人から回ってきたシートの２の空欄に、１の欄に記入されたことから連想したアイディアとは違うものを記入する。
⑤ この手順で、合計６回繰り返し、シートを埋める。
⑥ グループで、アイディアの優先順位を付け、構造化などし、別のシートにまとめる。
⑦ グループの代表者が５分以内で発表する。

［留意点］

・付箋紙は横書きでできるだけ大きな文字で、簡潔に箇条書きで記入してください。
・前の人のアイディアをヒントに、発想を広げる。
・できるだけすべての欄を埋めるようにする。
・実現できそうにないアイディアでもかまわない。

校内職員研修演習班

班	
1	武茂　桜庭　小熊　鎌田美　大高　教頭
2	佐茂　猿田　松岡　工藤　原田
3	細谷　船木英　羽深　岩谷　熊谷　奥田
4	加賀谷　畠山康　小栁　三浦誠　三浦州　加藤範
5	牧野　檜森　戸坂　正中　鈴木　木藤
6	渡辺　佐々木佳　山科　塚本　三浦健

演　習　シ　ー　ト

テーマ：活気のある学校にするためには

	A	B	C
1 ⇩	付箋紙 ○○○○○○○ ○○○○	付箋紙 ○○○○○○○ ○○○○	付箋紙 ○○○○○○○ ○○○○
2 ⇩			
3 ⇩			
4 ⇩			
5 ⇩			
6			

Ⅱ　校内研究授業

平成２３年度　第１回校内研究授業　実施要項

１　目　　的　　研究協議会を活性化し、課題を具体化し共有することによって授業力の向上を目指す。

２　授業テーマ　　生徒が積極的に授業に取り組み、豊かな表現力を身につける授業展開の工夫

３　期　　日　　平成２３年６月２２日（水）

４　日　　程

	～１３：４５	短縮授業
	１３：４５～	清掃
	１４：２０～１５：１０	研究授業
	１５：２０～	研究協議会（会議室）

５　研究授業クラス・授業者・授業教室

クラス	科　　目	授業者	使用教室
３Ａ	数　学　Ⅱ	加藤　　範昭	３年Ａ組教室
３Ｂ	英　語　Ⅱ	桜庭　　清彦	３年Ｂ組教室
２Ａ	世 界 史 Ｂ	太田　和佳子	２年Ａ組教室
２Ｂ	簿　　記	柏谷　亜紀子	２年Ｂ組教室
１Ａ	理科総合Ｂ	工藤　　卓哉	会　議　室
１Ｂ	国 語 総 合	小熊　　健	１年Ｂ組教室

授業参観時の留意点

・付箋紙には横書きでできるだけ大きな文字で、簡潔に箇条書きで記入してください。
・付箋紙（青）は指導者の参考になった点、付箋紙（ピンク）には、指導者への疑問点や課題を、付箋紙（緑）は生徒の良かった点、付箋紙（黄）は生徒の課題等を記入します。

研究協議会

1　ワークショップ　班割

班	授　業　者	ワークショップ参加者
1	加藤　　範昭	武志　良治、堀井　崇之、船木　英也、畠山　康治 熊谷有紀子、奥田　勝秋
2	桜庭　　清彦	戸坂　圭子、原田智津子、佐藤　　茂、鎌田　　亨 山科あさか、三浦　幹夫
3	太田　和佳子	渡邊　義人、細谷　健朗、畠山　浩樹、小柳　　順 三浦　誠一、木藤　大嗣
4	柏谷　亜紀子	加賀谷富男、猿田　英幸、岩谷　裕次、鈴木　　元 三浦　健吾、松山大志郎
5	工藤　　卓哉	加藤　竜悦、牧野　俊彦、船木　和則、鎌田美津子 江畑　邦彦
6	小熊　　健	正中加代子、渡辺　　薫、松岡　浩行、大高　英俊 塚本　誠進、

2　タイムスケジュール

１５：２５～	・班内で、司会者・発表者を割り当ててください。
１５：３０～１６：２０	・模造紙に、授業参観時に記入したワークシートを貼りながら、意見を出します。 ・同じ意見・同じ視点のものはグループ化し、改善策を考えてみましょう。
１６：２０～１６：４０	・各班の発表（３分程度で協議内容を伝えてください。）
１６：４０～１６：５０	・講評（校長先生、教頭先生）

数 学 科（数 学 Ⅱ） 学 習 指 導 案

日　時　平成２３年６月２２日（水）６校時
クラス　普通科３年Ａ組
場　所　普通科３年Ａ組 教 室
授業者　加 藤 範 昭

１．単　元　名　第２章　図形と方程式　　２節　円の方程式

２．指導目標　与えられた点からの距離が一定である点の全体として円の方程式を導き、円の性質を調べ、円についての理解を深める。

３．指導計画　教科書：　新数学Ⅱ（東京書籍）、　副教材：ニューファースト新数学Ⅱ
１．円の方程式　　２時間
２．円と直線　　４時間（本時１／４）

４．本時の目標　円と直線の位置関係を、それらの方程式を用いて調べ、連立方程式の解の図形的意味を明らかにする。（共有点の個数と２次方程式の判別式の符号の関連について理解させる）

５．生徒の実態　男子１９名、女子１３名からなっている。授業に対する姿勢はまじめな生徒が多いが、基本的な計算や内容の理解に時間のかかる生徒も少なくない。

６．学習過程

過程	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 ５分	・　本時の目標の提示する。 ・共有点の求め方の確認をする。	・本時の目標の確認 ・説明を聞く。	・共有点は連立方程式を解くことによって求まることの確認を、直線を例にして示す。	・授業に臨む態度が良好か。 （Ａ）
展 開 ４０分	・例題を用いて、直線と円の共有点の座標を求める解法を示す。 ・二次方程式の解の公式を確認する。 ・共有点を持たない例を提示し、２次方程式の判別式Ｄの符号と共有点の個数の関係を考えさせる。	・板書された内容をノートに書き写したり、問題を解くことで、理解を深める。 ・　教科書Ｐ５７の問６を解く。 プリントの問題を解く 円：$x^2+y^2=2$と直線：$y=x+3$との共有点の座標を求めることにより位置関係を考える。	・基本的なことの確認をしながら説明する。 ・時々考える時間をとる。 ・図形的意味を確認させるため図を書かせる。 ・共有点の座標を求めた後、直線と円の位置関係を描くように指導する。 ・判別式の符号が異なる例を３問提示し、既習事項の確認をする。 ☆生徒に発言・発表の場を多く与える。	**・図示できる。（Ｂ）** **既習事項を利用して答えを導くことができる。（Ｃ）**
まとめ ５分	・本時のまとめ	・板書されている問題の解答を用いて、教科書にまとめてある考え方の理解を深める。	・教科書Ｐ５８問７は宿題とする。	・本時の学習内容を理解できたか。 （Ｄ）

※評価の観点　Ａ：関心・意欲・態度　Ｂ：数学的な見方や考え方　Ｃ：表現・処理　　Ｄ：知識・理解

授　業　案

授業者　桜庭　清彦

1　日　付：2011 年 6 月 22 日（水）
2　クラス：３年Ｂ組（18boys　and　14girls）
3　教科書：Captain　English　Course　Ⅱ　（TAISYHUKAN）
Lesson ７“ Life　in　Space ”　Part １【２時間目】
4　クラス状況：生徒たちは明るく、活動的な面も見られるが、英語に対する根強い抵抗感をもっている。授業には意外と前向きに参加しようとする姿勢もある。
5　授業の狙い：（１）英語を聞き取らせ、耳慣らし、口慣らしをしながら授業への参加を促す。
（２）過去完了の意味と用法を確認する。

授業展開	活動内容	指導場の留意点	評価
導入 （７分）	1　宇宙での人類の活動の流れ 2　前時で確認した単語や表現の確認と発音練習	・フラッシュカードを用いてリピート	・声を出し音読に参加しているか
展開 （３８分）	1　Part １本文 ＊音読　model　reading chorus　reading 2　Part １の内容確認 ＊プリントを使って部分ごとの意味を確認 ＊ Part １全体のｲﾝﾀﾋﾞｭｰの流れを確認 3　Key　expressions の意味・用法を確認 ＊プリントを使って過去完了の意味を考える ＊過去完了を利用した英作文とその reading practice	・新出単語の発音やイントネーション、意味の区切り等を確認しながら、音読させる ・プリントで不完全なところを埋め、内容を把握させる ・いくつかの質問により Part １全体の内容を把握させる ・黒板に例示し、過去完了の意味と使用例を確認させる ・チェックした英文を音読させる	・宇宙での生活に関する情報を正しく読み取っているか ・読み取った内容の要点を捉え、整理しているか ・積極的に工夫して作文にしているか
まとめ （５分）	1　学習内容の確認	・キーワードを考えさせながら要旨を捉え、内容を確認させる ・Part ２＆３の展開を予測させる	

地歴・公民 科

学 習 指 導 案

科目名 世界史Ｂ

実施日時　平成２３年６月２２日(水) ６校時
授業学級　２年Ａ組(実施教室：２年Ａ組)
指 導 者　　太　田　和佳子

１．単元(教材)　ローマ帝国と地中海世界

２．単元の目標　古代ヨーロッパ史におけるローマ帝国の重要性を、帝国の成立、政治体制の変化、文化とともに理解し、現在まで影響を与えるローマの歴史的存在意義に気づく。

３．生徒の実態　２年Ａ組全員履修である。世界史に対する興味関心の高い生徒が多く、授業にも意欲的、積極的な参加が見られる。しかし、発言が一部の生徒に偏る傾向があり、集中力の持続しない生徒もいる。授業の折々で発言や思考、活動を促しながら、授業参加と学習内容の理解を深めていきたい。

４．指導計画（８時間）
・ローマ建国と共和制
・地中海世界の統一（本時２／８）
・帝政の始まり
・すべての道はローマに通じる
・ローマ帝国の解体
・実用的なローマ文化
・キリスト教の成立と発展
・パルティアとササン朝

５．本時の計画

(1)本時到達目標

・ローマ帝国の発展の契機となるポエニ戦争を理解する。
・ハンニバルの戦術を具体的に学び、世界史に対する興味関心を養う。
・ローマ帝国の領土拡大を作業を通しながら理解する。

(2)学習過程

段階(分)	学習内容・活動	指導上の留意点	評価規準および評価方法	観点
導入 (３)	○前時の復習	・指名せず生徒の自主的発言を促す	・発問に答えようとしているか	①
展開 (44)	○地中海世界の統一 ・フェニキア人	・フェニキア人について確認する（民族の特徴、文字など）	・既習知識が定着しているか	④
	・ポエニ戦争（ハンニバル）	・ポエニ戦争を戦いや人物を通して理解させる（資料集の利用） ・地図の作業で理解を深める ・机間巡視で支援する（まだノートには貼らせない）	・理解できているか ・意欲的に作業に取り組んでいるか	④ ①
	・領土拡大	・領土が広がる様子を作業を通して理解させる ・机間巡視で支援する	・作業が円滑にできているか	②
整理 (３)	○ノート整理	・地図を貼らせる。	・地図・ノートが整理されているか	②

校内研究授業　簿記　学習指導案

日　　時：平成２３年６月２２日（水）６校時
ク ラ ス：２年Ｂ組３４名（男子 17 名、女子 17 名）
使用教室：２年Ｂ組教室
授 業 者：柏　谷　亜紀子

１．単　　元　　新簿記　新訂版（実教出版）
　　第１０章　　現金・預金などの取引

２．単元の目標　　現金に関する記帳方法と現金出納帳の記帳方法について理解させる。
　　現金過不足の処理方法を理解させる。
　　当座預金・当座借越勘定の記帳方法と当座預金出納帳の記帳方法について理解させる。
　　小口現金のシステムを理解させ、その記帳方法と記帳の習熟をはかる。

３．生徒の実態
　明るく意欲的な生徒が多く、発問に対しても答えようとする姿勢が多くの生徒に見受けられる。前向きさが自由な発言につながり目標を見失う場面もあるため、目標を明確にして、メリハリのある授業展開を心がけていきたい。

４．指導計画
　１．現　　金 ┐ ３時間
　２．現金出納帳 ┘ 【本時１ｈ／３ｈ】
　３．現金過不足　　２時間
　４．当 座 預 金　　１時間
　５．当 座 借 越　　１時間
　６．当座預金出納帳　　1.5 時間
　７．その他の預貯金　　0.5 時間
　８．小　口　現　金 ┐ ２時間
　９．小口現金出納帳 ┘

５．本時の目標　　簿記上、現金として扱われるものは何かを整理する。
　　現金に関する取引の仕訳を理解させる。
　　現金出納帳の役割を理解し、その記入方法に習熟させる。

６．展　　開

過程	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 １０分	・本時の目標 ・簿記上の現金とは何か	・本時の目標を確かめる ・簿記上での現金には何があるか知る	・日常の現金と簿記上の現金の違いを明確にする	・プリントにまとめているか（A）
展開 ３５分	【現金に関する取引】 ・取引の分析 ・仕訳 ・現金出納帳	・何が増減しているか見つけ出す ・仕訳を行う ・現金出納帳に記帳する	・取引の分析をもとに仕訳させる ・誰が見てもわかりやすいように丁寧に記帳させる	・各勘定の増減を見つけ出せたか（B・D） ・分析をもとに仕訳ができているか（C） ・現金出納帳に記入すべき事柄が記入しているか（C）
まとめ ５分	・学習内容の確認	・取引の分析から記帳までの流れを確かめる ・現金出納帳を見ると何がわかるか考える	・簿記は一連の作業によって行われるため、流れに従って作業することの重要性に気づかせる	・本時のプリントを落ち着いて見ているか（A）

評価－A：興味・関心　　B：思考・判断　　C：技能・表現　　D：知識・理解

理科（理科総合Ｂ）学習指導案

日　時　　平成２３年6月２２日（水）６校時
クラス　　１年普通科Ａ組
場　所　　会　議　室
授業者　　工　藤　卓　哉

1　単　元　名　　地球の姿と移り変わり
本時「大気と水の循環」

2　指 導 目 標　　大気と水の地球規模の循環や運動について理解させ、地球上では熱の移動が行われ熱的平衡が保たれていることを認識させる。

3　指 導 計 画　　教科書　高等学校改訂版理科総合Ｂ（第一学習社）
１　大気と水の働き　６時間（本時４／６）
２　日本の天気　　５時間
３　まとめ　　２時間

4　本時の目標　　地球の温度を一定に保つのは、主に水蒸気の温室効果ガスによるものと理解し、さらに影響度の高い温室効果ガスの増加による地球温暖化について学習する。

5　生徒の実態　　男子１６名、女子１７名の普通科のクラス。真面目に学習に取り組む生徒が多い。
発問に対する応答が少なくおとなしい。

6　学 習 過 程

過程	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入５分	・温室効果ガスについて復習する。	・ノートを確認して、今まで学習した温室効果ガスを答える。	・二酸化炭素や水蒸気が答えられるよう発問する。	・今までの学習の流れを理解できているか。（Ｂ，Ｃ，Ｄ）
展開４０分	・理科ねっとわーくの教材を用いて温室効果ガスのはたらきについて理解させる。 ・温室効果ガスの増加による地球温暖化について学習する。	・地球の大気と温度平衡の関係を理解する。 ・地球温暖化の原因について追求する。 ・地球温暖化の影響について考える。	・パソコンを使っての説明になるので、一方的な授業にならないように心がける。 ・生徒のリクエストや理解度に応じて動画を弾力的に活用する。	・温室効果ガスのはたらきや地球温暖化について関心を持って授業に参加しているか。（Ａ） ・動画を見て状況をイメージできるか。（Ｂ・Ｃ）
まとめ５分	・地球温暖化についてまとめる。	・ひとりひとりが問題に取り組むことにより地球温暖化の対策ができることを理解する。	・授業についてきちんとまとめるよう説明する。	・地球温暖化についてについて理解できたか。（Ｄ）

※　評価の観点
Ａ：関心・意欲・態度、Ｂ：思考・判断、Ｃ：技能・表現、Ｄ：知識・理解

7　使 用 器 具　パソコン・プロジェクター
※　５校時までに準備する。

（国語）科　国語総合学習指導案

日　時　：平成２３年６月２２日（水）５校時
クラス　：１年普通科Ｂ組
場　所　：１年普通科Ｂ組教室
授業者　：小熊　健
教科書　：新編国語総合改訂版（大修館書店）

1　単　元　名　１、古文に親しむ「児のそら寝」
2　指　導　目　標　・古文を読む楽しさを味わい、主体的に読解する態度を養う。
・基礎的な知識を学びつつ、構成・展開を的確にとらえる力を身につけさせる。
3　指　導　計　画　配当時間　４時間
・（１時間）読解の基礎的事項の確認
・（１時間）本文の読解
・（１時間）本文の読解
・(１時間) 本文の読解・「まとめ評価プリント」の実施（本時）
4　本時（４／４時間）の目標
・単元の「まとめ評価プリント」を完成させ授業の振り返りとし、内容の理解度を深める。
5　生徒の実態　男子１６名、女子１７、計３３名のクラス。授業に真面目に取り組む姿勢はできているが、やや積極性に欠け、基礎的な部分では個人差がかなり大きい。
6　学　習　過　程

過　程	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 ５分	・学ぶ姿勢を整える。 ・本時の学習内容を確認する。	・学習道具を準備する。 ・本時の目標を確認する。	・教科書、ノート辞書等を準備させる。	・授業に臨む態度か。 A
展開 ４０分	・音読を繰り返し正確に読むことができるようにする。 ・辞書を活用し、重要語句、難読語等を調べる。 ・内容の構成や展開について、プリントの形式に従いまとめる。	・平易で短い文章を繰り返し読み、古文の口調に慣れる。 ・それぞれ辞書を活用し、適切な内容を話し合いながら辞書より選択する。 ・ノートと教科書を活用し、話し合いながらプリントにまとめる。	・斉読や指名読みなどで古文のリズム感をつかませ親しみをもたせる。 ・教科書の内容と比較させ適切なものを選択させる。 ・机間巡視し話し合いのアドバイスを行い考えさせる。	・古文特有のリズム感や口調のよさをつかみ、正確に読むことができたか。 B ・適切なものを選択できたか。 B・D・E ・話し合いに参加し、意見をまとめられたか。 D・B
まとめ ５分	・本時の学習内容を確認する。	・本時の学習内容を確認する。	・プリント・ノート、教科書を確認させる。	・本時の内容が確認できたか。 E

＊評価の観点
A：関心・意欲・態度　B：話す・聞く能力　C：書く能力　D：読む能力　E：知識・理解

研究協議会　　＜各班のワークショップ＞

●３Ａ・数学Ⅱ　加藤先生

指導者が描いたグラフは分かりやすく､発問や生徒からの質問に対する反応も良かった。また、生徒からの答えや反応を引き出そうとしていた。生徒も反応が良く、説明を聞いて積極的に答えたり、質問したりする生徒がいた。一方、生徒がノートを取るときの間の取り方、説明を聞くときのメリハリを付ければ、より学力の向上につながるのではないだろうか。答えさせるときには起立させることも必要だろう。

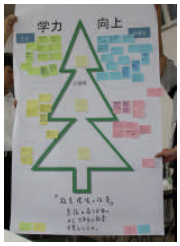
●３Ｂ・英語Ⅱ　桜庭先生

指導者の和訳や過去完了のプリント、図を使っての説明が良かった。楽しく英語に取り組ませ、声を出させるための励ましもあり、生徒との関係が良好であることが伺われた。しかし、指示や説明の時間が長く、消極的な生徒への支援が不足気味であった。生徒は私語がなく、英語に取り組む雰囲気が良好で、問いかけに対して良く反応し、疑問点を解決しようとする質問や活動の仕方を確認する積極的な姿勢が見られたが、消極的な生徒も若干いた。以上から、机間指導を通して消極的な生徒への声かけを行い、指示や活動を簡潔に行い、適切な時間配分を行えば学力向上につながるだろう。

●２Ａ・世界史Ｂ　太田先生

生徒の意欲・関心を引きつけ、生徒自身に地図を作らせるなど、考える機会がある授業だった。板書の仕方や雰囲気も良く、生徒とのやりとりも多い授業だった。生徒も学習の準備が整い、自主的な発言も多く、意欲的・積極的に取り組んでいた。しかし、発言する生徒の席が偏ってしまっていた。このことから、生徒の整容面や言葉使いを改善し、発言の少ない生徒が活躍できる機会を設け、より一層生徒の動きがある授業を展開すれば、より学力向上につながるのではないだろうか。また、黒板下部が教室後方の生徒にも見やす

い環境改善をお願いしたい。



●２Ｂ・簿記　柏谷先生

本時の目標が明確で、プリントが分かりやすく、例を挙げるときも生徒に分かりやすい内容だった。声の大きさも聞きやすく、机間指導も良かった。生徒も女子生徒を中心に積極的に授業に臨み、質問をしていた。しかし、一部の男子生徒に集中力が不足する場面もあった。このことから、座席を工夫し、簿記検定への意識付けにより生徒の興味関心を引き出こと、呼名してから発問をするなど、発問の工夫があればより学力向上につながるのではないか。そして、可能ならばＴ・Ｔをした方が良いのではないか。

●１Ａ・理科総合Ｂ　工藤先生

視聴覚機器を使った授業で、生徒に見せる授業をするための教材研究が充実していた。そのスライドを見て、地球温暖化のストーリーを絵でまとめている生徒もいた。クイズ形式の発問に積極的に答える生徒もおり、雰囲気が良かった。しかし、説明中心となってしまったこともあり、集中力が切れてしまった生徒もいたようだ。このことから、生徒との雰囲気作りを続けながら、生徒の把握に努め、積極的に取り組む生徒を活かしていけば、より学力向上につながるのではないだろうか。

●１Ｂ・国語総合　小熊先生

声が大きく指示が明確で、グループ形態を効果的に利用した授業で、和やかな雰囲気だった。生徒も声を出してしっかり音読し、積極的に発言するなど、よく取り組んでいた。しかし、集中力が切れてしまう場面も見られ、整容面も含めてその都度注意する必要があるだろう。また、指導者が内容の焦点を絞り、余裕のある時間配分を行えば、より生徒の学力向上につながるのではないだろうか。

平成２３年度　第２回校内研究授業　実施要項

1　目　　的　　研究協議会を活性化し、課題を具体化し共有することによって授業力の向上を目指す。

2　授業テーマ　　生徒が積極的に授業に取り組み、豊かな表現力を身につける授業展開の工夫

3　期　　日　　平成２３年１１月２１日（月）

4　日　　程

～１３：４５	短縮授業
１３：４５～	清掃
１４：２０～１５：１０	研究授業
１５：２０～	研究協議会（会議室）

5　研究授業クラス・授業者・授業教室

クラス	科　　目	授業者	使用教室
３環	栽 培 漁 業 電 気 工 学	船木　英也 猿田　英幸	栽 培 実 習 室 ３年環境科教室
３科	電気通信理論	渡辺　　薫	３年科学科教室
２環	漁　　業	畠山　康治	２年環境科教室
２科	通 信 工 学 水産食品管理	鎌田　　亨 鎌田美津子	通信実習室Ｂ 化 学 分 析 室
１環	水 産 基 礎	岩谷　裕次	１年環境科教室
１科	水産食品製造	畠山　浩樹	１年科学科教室

授業参観時の留意点

・付箋紙には横書きでできるだけ大きな文字で、簡潔に箇条書きで記入してください。
・付箋紙（青）は指導者の参考になった点、付箋紙（ピンク）には、指導者への疑問点や課題を、付箋紙（緑）は生徒の良かった点、付箋紙（黄）は生徒の課題等を記入します。

研究協議会

1　ワークショップ　班割

班	授　業　者	ワークショップ参加者
1	船木　英也	武茂良治、加賀谷富男、鈴木元、三浦健吾
2	猿田　英幸	佐藤茂、牧野俊彦、山科あさか、三浦州
3	渡辺　　薫	渡邊義人、桜庭清彦、大高英俊、三浦幹夫
4	畠山　康治	細谷健朗、檜森正人、三浦誠一、松山大志郎
5	鎌田　　亨	加藤範昭、正中加代子、塚本誠進、木藤大嗣
6	鎌田美津子	羽深康之、戸坂圭子、小栁順、奥田勝秋
7	岩谷　裕次	船木和則、太田和佳子、工藤卓哉、原田智津子
8	畠山　浩樹	小熊健、松岡浩行、佐々木佳奈子、江畑邦彦

2　タイムスケジュール

１５：２５～	・班内で、司会者・発表者を割り当ててください。
１５：３０～１６：１５	・模造紙に、授業参観時に記入したワークシートを貼りながら、意見を出します。 ・同じ意見・同じ視点のものはグループ化し、改善策を考えてみましょう。
１６：１５～１６：４０	・各班の発表（３分程度で協議内容を伝えてください。）
１６：４０～１６：５０	・講評（校長先生、教頭先生）

水産科（科目名　栽培漁業）学習指導案

日　時　　平成２３年１１月２１日(月)６校時
クラス　　海洋環境科３年(航海系)
場　所　　栽培実習室
授業者　　船木　英也

1　単 元 名　　第７章　主な栽培漁業　　第３節　魚類の養殖

2　指導目標　　主な水産生物の養殖における種苗生産技術と養殖技術について理解する。

3　指導計画　　第８　ブリ（ハマチ）の養殖　　２時間
　　１　種苗　　１時間　(本時１／２)
　　２　放養・養成　　１時間

4　本時の目標　・ブリ養殖における天然種苗生産と人工種苗生産の流れを理解する。
　　・人工種苗生産の必要性についてまとめることができる。

5　生徒の実態　　航海系２１名のクラスである。真面目に学習に取り組む生徒が多いが、やや積極性に欠ける面もある。

6　学習過程

過程	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 １０分	・出生魚の種類について確認する。 ・本時の目標の確認。	・プロジェクターで確認する。 ・本時の目標の確認をする。	・教科書以外の出世魚についてもふれる。	・授業に積極的に参加しようとしているか。　（A）
展開 ３０分	・天然種苗	・天然種苗の稚魚(モジャコ)の採捕、飼育、出荷までの流れについて知る。	・モジャコの生態・採捕方法についてプロジェクターで理解させる。 ・モジャコの飼育、出荷までの流れについて理解させる。	・天然種苗稚魚から出荷までの流れが理解できたか。（A，B）
	・人工種苗	・人工種苗の採卵・受精、飼育、出荷までの流れについて知る。	・採卵法、受精法について発問して確認する。	・人工種苗採卵・受精からから出荷までの流れが理解できたか。（A，B）
		・飼育の注意点について理解する。	・飼育に関する注意点として、餌料・予防接種・選別について説明する。	
	・人工種苗生産の必要性	・養殖経営での重要事項について考える。	・完全養殖の意味及び天然種苗と比較し、人工種苗生産の必要性を考えさせる。	・人工種苗生産の必要性をまとめることができたか。（B，D）
まとめ １０分	・本時の復習と次時の学習内容を確認。	・ブリの漁獲量と漁獲量ランキングについて考える。	・天然ブリと養殖ブリの漁獲量及び都道府県別の漁獲量ランキングを考えさせる。	・本時の学習に積極的に取り組むことができたか。（B）

※評価の観点
A：関心・意欲・態度、　B：思考・判断・表現　C：技能、　D：知識・理解

「電気工学」学　習　指　導　案

日　時　　平成２３年１１月２１日（月）６校時
クラス　　海洋環境科３年
場　所　　海洋環境科３年教室
授業者　　猿田　英幸

１．単 元 名　　第５節　交流と交流回路　　第６　交流回路の基本計算

２．指導目標　　直流と交流の違いについて理解させ、交流の回路計算、交流電力の計算ができるようにする。

３．指導計画　　教科書：電気工学（文部科学省）
第５節　交流と交流回路
第６　交流回路の基本計算　（本時１／３）

４．本時の目標　Ｒ－Ｌ直列回路のベクトル図を書き、Ｒ－Ｌ直列回路のインピーダンス、電流、各部の電圧を求めることができるようにする。

５．生徒の実態　授業は工学科目選択者男子１９名。授業に対してはまじめに取り組むことができるが、なかなか内容についてこれず、最後まで集中できない者もいる。

６．学習過程

過程	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 ５分	・Ｒ、Ｌ単独回路の大きさの関係、ベクトル図の確認をする。	・プリントに各自書き込む。 ・指名により板書し、各自確認をする。	・ベクトル図が書けるか確認をする。	・授業に臨む態度はできているか。（Ａ）
展開 ４０分	・本時の目標を説明する。 ・電圧は、各部の電圧のベクトル和であることを説明する。 ・Ｒ－Ｌ直列回路のベクトル図を書き、電圧と電流の関係について説明する。 ・電圧の大きさは、三平方の定理で求まることを説明する。 ・インピーダンスについて理解させる。 ・プリントの問題を解かせる。	・説明を聞きながら、板書された内容をノートに書き写す。 ・プリントの問題を解く。 ・指名された者は板書する。	・電流と電圧の関係であることを説明する。 ・直流との違いを確認する。 ・ ・電流が基準であることを確認する。 ・どの三角形なのかに注意して説明する。 ・交流回路の電流の流れを妨げるものはインピーダンスであることを説明する。 ・個別に指導する。	・ベクトル図について理解できたか。（Ｄ） ・インピーダンス、電流、電圧を求めることができるか（Ａ、Ｄ）
まとめ ５分	・本時のまとめ	・インピーダンス、電圧、電流の関係について確認する。	・次時のＲ－Ｃ直列回路についてもふれる。	・本時の学習内容を理解できたか。（Ｄ）

※評価の観点　Ａ：関心・意欲・態度　Ｂ：思考・判断　Ｃ：技能・表現　Ｄ：知識・理解

水産科（電気通信理論）学習指導案

日　時 ：　平成２３年１１月２１日（水）６校時
クラス ：　海洋科学科３年
場　所 ：　教室
指導者 ：　渡辺　薫
教科書 ：　電気通信理論１

１．単　　元　　名
　並列共振回路
２．指　導　目　標
　特性を復習し練習問題の解法を学ぶ
３．生徒の実態
　３４名（男子１９名、女子１５名）積極的な発言は多くない。
４．指導計画
　並列共振回路　　３時間
５．本時のねらい
　特性を復習して理解を深め、練習問題を解く。
６．本時の展開

過程(分)	指導内容	学習活動	指導上の留意点	評価の観点（①～④）
１０	回路と特性	電流の平衡式を作りオームの法則を適用してアドミタンスを求める。	式の作成手順と思考の流れに留意する。	意欲的に書いているか。（①）
１５	式の詳細	ベクトルとその大小関係を式と図で確認する。	虚数に留意する。	図を書けるか。（③）
１０	特性のまとめ	共振の驚くべき特徴を確認する。	説明を強調する。	理解しているか。（②、④）
１５	練習問題	練習問題を解く。	概算を重視する。	計算ができるか。（③、④）

＊評価の観点（*各教科の評価の観点を記載する*）
　① 関心・意欲・態度　　②思考・判断　　③技能・表現　　④知識理解

水産科（科目名　漁業）　学習指導案

日　　時　　平成２３年１１月２１日(月)６校時
クラス　　海洋環境科２年
場　　所　　海洋環境科２年教室
授 業 者　　畠山康治

1　単元名　　漁業機械と計測機械、冷凍機械

2　指導目標　　漁具と漁法について理解させる。そして、これからの漁業を持続的に行うために、資源を有効に利用できるよう漁具と漁法を理解させ、効率良く、無駄のない取り方を考えさせる。また漁業機械についても理解させ、取扱方法や保全管理を身につけさせる。

3　指導計画　　第３章　漁業技術　　第３節　漁業機械と計測機械、冷凍機械（配当３時間）
①　漁業機械（１時間）
②　漁業計測機器（１時間）
③　冷凍機械（１時間）　　･･･　本時

4　本時のねらい　　冷凍機械のシステムを説明し、その原理を理解させる。また冷凍機械の操作方法や凍結方式を理解させる。そして、鮮度の保持についての理解を深める。

5　生徒の実態　　男子 30 名，女子 1 名，計 31 名のクラスである。授業に意欲的に取り組む生徒が多い。漁業技術の分野に入ってからは、工学系の生徒の理解が早いように見える。授業態度は概ね良好である。

6　学習過程

過程	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 ５分	・授業環境の整備 ・前時の授業内容の確認 ・本時の授業内容の確認	・授業に向かう環境を整える ・前時のノートを確認する ・本時の授業内容を確認する	・自分の周りや教室の環境を整えさせる ・授業の目的を理解させる	
展開 ４０分	・冷凍機のサイクル ・凍結方式 ・鮮度保持	・冷媒の循環について理解する。 ・蒸発器,圧縮器,凝縮器,膨張弁について理解する ・さまざまな凍結方式を理解する ・水産物の鮮度保持の方法について考えてみる。	・人間の体を例に体温の低下について説明する ・機器の役割を理解させる ・魚の凍結率との関係を考えさせる ・緩慢凍結と急速凍結の違いについて考えさせる ・さまざまな鮮度保持について説明する。	・ものを冷やすしくみを理解できる（B） ・機器の役割を理解できる（D） ・凍結の過程を理解できる（B・D） ・凍結についてそのシステムを理解している（D）
まとめ ５分	・本時のまとめ ・次時の確認	・本時に学習したことと次時に行うことを確認する	・本時の学習内容を再確認させる	

※評価の観点　　A－関心・意欲・態度　　B－思考・判断　　C－技能・表現　　D－知識・理解

通信工学　学習指導案

日　時　平成２３年１１月２１日（月）６校時
クラス　海洋科学科２年（在籍　１６名）
教科書　通信工学１（海文堂）
授業者　鎌　田　　亨

１．単元名　　電磁力について

２．単元の目標　　アマチュア無線の試験にも出題される、フレミングの左手の法則（電流・磁界・電磁力）について考える。

３．本時のねらい　　電磁力を利用しているモータの原理について理解する。

４．生徒の実態　　男子１４名、女子２名の選択クラスである。比較的明るくまとまりのあるクラスである。自分で考えようとする意欲がやや欠ける生徒が多いと思われる。

５．授業展開計画　（A：関心・意欲・態度　B：思考・判断　C：技能・表現　D：知識・理解）

過程	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 (１０)	・本時の目標の提示	・電流による磁界について練習問題を解く	・学習内容をまとめたプリントを配布する ・簡単な実験で磁界の発生を確認させる	・準備ができているか（A） ・実験に取り組んでいるか（C）
展開 (３０)	・電磁力の発生のしくみを理解する ・電磁力を偶力として活用するとモータになることを理解する	・永久磁石と電流による磁力線を記入させる ・磁力線の粗密により、電磁力が発生するしくみを記入させる ・回転子に発生する電磁力を記入させ、それが偶力になることを確認する	・磁力線の方向が理解できているか確認する ・磁力線の密から粗の方向に電磁力が発生することが理解できたか確認する ・簡単なモデルを使用し理解の定着につとめる	・積極的に参加しているか（A） ・プリントに記入しているか（A、B） ・説明をよく聞いているか（A）
整理 (１０)	・本時のまとめ	・風力発電の原理について予測を記入させる	・プリントが記入させているかを確認し、提出させる	・自分の考えをまとめているか(B、D)

水産（水産食品管理）学習指導案

日　時　平成 23 年 11 月 21 日（月）6 校時
クラス　２年海洋科学科
場　所　化学分析室
授業者　鎌田美津子

1　単 元 名　第２章 水産食品の成分変化　第７ビタミン

2　指導目標　普段から食べている食品に含まれるビタミンの働きと欠乏症を知り、食品中のビタミン含有量をグラフで示す。

3　指導計画　ビタミンの発見　１時間
ビタミンの種類と生理作用　３時間（本時２／３）

4　本時の目標　ビタミンの作用と働き、欠乏症をまとめる。脂溶性ビタミンの含有量をグラフで示す。

5　生徒の実態　食品系科目選択者１７名（男子１２名、女子５名）である。理解力があり、発想が豊かな生徒が多い。集中力が欠けるときもあるが、学習内容を理解して一般生活の疑問点を積極的に質問し、理解を深めることもある。

6　学習過程

過程	生徒の活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 5 分	・ビタミンA、Dの生理作用、欠乏症を答える ・本時の目標を確認する	・前時の復習であることを伝え、自主的発言を促す ・到達目標を確認させる	 ・きちんと話を聞いているか（A）
展 開 42 分	・教科書を読み、生理作用、欠乏症をまとめる ・ビタミンE ・ビタミンK ・過剰摂取した場合の影響をノートにまとめる ・ビタミンA ・ビタミンD ・ビタミンE ・ビタミンK ・ビタミン含有量を表から読みとり、グラフで示す	・生理作用、欠乏症について発問し、きちんと文章で答えさせる ・指名する ・教科書に記載されていない内容であると伝える ・ノートにきちんと書かせる ・水産物のビタミンについて触れる ・ビタミンにより、表示されている単位が違うことを注意する	・文章で答えることができたか（B） ・ノートをとっているか（A） ・グラフを作成することができたか（B、C） ・単位を間違えずにグラフを作成することができたか（D）
まとめ 3 分	・ノート、教科書を見て、本時の学習事項を確認する	・教科書、ノートを確認させる	・ノート、教科書を確認しているか（A）

※評価の観点　A：関心･意欲･態度、B：思考･判断･表現、C：技能、D：知識･理解
※評価の方法　A→観察、B→発表・レポート、C→レポート、D→質疑応答

海洋環境科（水産基礎）学習指導案

指導者名　　岩谷 裕次

1　日時・時限　　平成２３年　１１月２１日（月）　６時限
2　学年・学科・人数　　第１学年・海洋環境科・２９名（男子２６名、女子３名）（使用教室名：１環教室）
3　生徒観　　授業内容の理解度に大きな個人差がある。また、１時間の授業に集中することができない生徒が数名おり、授業展開の妨げとなる場面もある。本時は、生徒の学習意欲を高めるためパワーポイントによる授業展開を実施する。ノートをまとめることが不得意な面もあるため、プレゼン形式のプリントにまとめさせる方法が有効であると考える。
4　教材名　　使用教科書名「水産基礎」（海文堂発行）
5　大単元名　　第１章　海のあらまし
6　大単元の目標　　水産や海洋と人間とのかかわり、水産資源及び海洋環境の保全と管理等についての知識を身に付け、それらが国民生活に果たしている役割を理解する。
7　大単元の学習計画
1　海と生活・・・・・・・・・・・・・・・　４時間
2　海と生物・・・・・・・・・・・・・・・　８時間（２時間／８時間）
3　水産生物の採集と飼育・観察・・・・・１２時間
4　海の環境と保全・・・・・・・・・・・　８時間
8　本時の小単元名　　２．２　水産生物の種類と分布　　（２）分類の仕方
9　本時の目標　　生物の分類の７段階方式を知り、身近な魚種の分類を考える。また、来年度の国際航海での操業対象であるマグロの種類と分類を知る。
10　本時の学習展開
※プレゼンテーションソフト（パワーポイント）を活用して授業を展開する。

過程	学習内容	生徒の活動	教師の活動と指導上の留意点	評価の観点・方法等	時間
導入	・本時の目標 ・身近にいる魚種	・本時の目標を知る。 ・身近な魚種を挙げる。自分たちで捕獲した魚種を考える。 ・プリントに魚種を書き込む。	・本時の目標を提示する。 ・生徒からの自発的な発言を誘導しながら魚種を挙げさせる。 ・図示しながら具体的なイメージを持たせる。	本時は、 『関心・意欲・態度』 『思考・判断・表現』 の２観点に重みをおき評価する。	10分
展開	・「分類」について ・「種」について ・７段階方式 ・マグロの種類 ・身近な魚類の分類	・分類について説明を聞き、プリントに書き込む。 ・種について説明を聞き、プリントに書き込む。 ・種の特徴を知る。 ・生物の分類の７段方式を知る。 ・マグロの種類を知り、その分類を考える。 ・身近な魚類の分類を知り、プリントに書き込む。	・プリントに書き込む時間と、説明を聞く時間の区別を指示する。 ・机間指導 ・具体的なイメージを持たせるように図示して説明する。 ・自然界では同種でのみ繁殖することを強調する。 ・机間指導 ・「読み方・漢字」に注意しながら指導する。 ・具体的なイメージを持たせるように図示して説明する。 ・板書しながら身近な魚類の分類を説明する。 ・生徒の反応を確認しながら進める。	『関心・意欲・態度』 授業全体を通して生徒の活動を観察して評価する。基本をBとして、取組状況の良い生徒をAとする。また、取組状況が悪い、忘れ物をする等の生徒はCとする。 『思考・判断・表現』 授業全体を通して生徒の活動を観察しても評価するが、主に提出プリント（ファイル）により後で判断する。	35分
まとめ	・本時のまとめ ・次時の予告	・生物の分類の７段方式を再確認する。 ・魚類の呼び方について考える。	・プリントをファイルに綴じさせ指示する。 ・アイナメを図示し、魚類の呼び方を考えさせる。 ・次時予告 「和名と学名」		5分

11　本時の評価と手だて　　提出プリント（ファイル）の取組状況等から、生物の７段階方式を知り、意欲的に授業に参加したか判断する。また、生徒の理解度を確認し、次時の授業展開を工夫する。

海洋科学科（水産食品製造）学習指導案

指導者名　　畠 山　浩 樹

1	日時・時限	平成２３年　１１月２１日（月）　６時限
2	学年・学科・人数	第１学年・海洋科学科・３１名（男子１７名、女子１３名）（使用教室名：１科ＨＲ）
3	生徒観	授業態度良好、一部脱線したがる生徒もいるが注意は素直に聞き入れることができる。１年次唯一の水産座学教科であり、好奇心も旺盛である。
4	教材名	使用教科書名「水産食品製造」（実教出版株式会社発行）
5	大単元名	第２章　水産食品の保蔵･加工
6	大単元の目標	化学反応や微生物増殖と温度との関係を理解するとともに温度帯による低温貯蔵法の分類について理解する。
7	大単元の学習計画	１　水産加工原料の性状・・・・・・・・・　３時間 ２　水産食品の保蔵と加工の原理・・・・・　５時間 ３　水産食品の保蔵法　　・・・・・・８時間（３時間／８時間）
8	本時の小単元名	第１　低温による保蔵法　　２　低温貯蔵法　（１）冷蔵　（２）凍結貯蔵
9	本時の目標	食品を凍結しない温度で冷却し貯蔵する「冷却冷蔵」と食品を凍結してから貯蔵する「凍結冷蔵」を理解する。また、食品の低温貯蔵に用いられる温度域と名称を理解する。
10	本時の学習展開	食品を凍結しない温度で冷却して貯蔵する「冷却冷蔵」と食品を凍結してから貯蔵する「凍結冷蔵」を理解する。また、食品の低温貯蔵に用いられる温度域と名称を理解する。

過程	学習内容	生徒の活動	教師の活動と指導上の留意点	評価の観点・方法等	時間
導入	・前時の復習 ・本時の目標	・ノートを確認し明確に答える。 ・本時の目標を知る。	・低温による植物性食品と動物性食品の違いを確認する。 ・酵母の発育・繁殖に適する温度の確認。 ・本時の目標を提示する。	関心･意欲･態度 身近な水産食品と食品製造について興味、関心を持ち、意欲的に授業に取り組んでいる。	8分
展開	・「冷蔵」と「冷凍」の違いについて ・「冷却冷蔵」の各温度帯について	・「冷蔵法」について説明を聞き、プリントに書き込む。 ・短期間の貯蔵と長期間の貯蔵が食品にどのような影響を与えるかを知る ・各冷却冷蔵の必要性をプリントに書き込む。 ・プリントから実際に利用されている温度帯を思考できる	・プリントに書き込む時間と、説明を聞く時間の区別を指示する。 ・机間指導 ・「冷蔵」は食品が凍結しない温度で水産物を生鮮状態に保つことはできるが鮮度低下や腐敗を完全に抑制できないことを理解させる。 ・「冷凍」の温度帯を理解させ「冷却冷蔵」についても理解させる。	思考･判断 魚介類の死後変化や食品の劣化要因から、適切な貯蔵法を考えることができる。 知識･理解 水産製造業を取り巻く社会情勢について理解できる。 水産加工原料の特性と食品の貯蔵原理を理解することができる。	35分
まとめ	・本時のまとめ ・次時の予告	・考査問題に占める割合が多いことを確認し、家庭学習にも「力」を入れる。	・魚介類の低温貯蔵は、需給の調整や価格の安定策として重要なことを知らせる。 ・次時予告 「凍結法」	※本時は、関心･意欲･態度と知識･理解を第３回考査の答案を考慮して評価に加味する。 プリント回収	7分

以上の観点を踏まえ
　○授業への取り組み状況（授業態度、学習参加状況）を加味して評価する。

研究協議会　　＜各班のワークショップ＞

●１班　【３年環境科　栽培漁業　船木英也先生】

教材として利用していたスライドの写真が分かり易かった。生徒参加型の授業であり、導入部ではクイズ形式や重要点のチェック(補足等)を行うことで生徒の興味を引く展開が良かった。また、授業の進度も適切であり、板書も生徒が書写しやすい速さであった。授業後半に生徒に発表させることで最後まで集中して終わることができた。

生徒の授業態度がとてもよく、積極的に参加していた。ノート整理がよくされており、ノートのとり方にもゆとりがあり良かった。質問時に指名された生徒の声が小さく、皆に伝わらないのではないかと思われる場面もあった。

改善点としては、地元(秋田)の状況をもっと話題に出すことで興味が深まると思われる。また、難しい字句の確認や発表時の起立がもっと徹底されるとよい。

●２班　【３年環境科　電気工学　猿田英幸先生】

声が大きく、またプリントを活用した前時の復習や授業の最後に行った「覚えて欲しいこと」の確認が良かった。板書に関しては、板書の写す時間を十分にとり、教卓を移動するなど生徒への配慮が見られた。しかし、目標の提示の仕方、本時の目標設定等にもう少し工夫がほしかった。また、個々の生徒の理解度を把握する上でも机間指導があればよかった。

雰囲気はなごやかで、生徒との信頼関係ができており、指導者の愛情が感じられた。全体的に生徒の反応も良く、自信のない問題でも答えようとする姿勢も良かった。授業後半になると質問への反応がなくなり集中できない生徒もいた。また、指導者への信頼関係がある反面、生徒の慣れ合い、甘えがちなところが見られたのが残念である。

●３班　【３年科学科　電気通信理論　渡辺薫先生】

板書が分かりやすく、声の大きさ、スピードも適切であった。また、黒板の左側を演習、右側を解説に使うなどの工夫や、全部板書せずに生徒に考えさせるなどの工夫がされていた。指導者の生徒に対する寛容な姿勢や表情が良い等、粘り強い指導で良かった。しかし、講義中心で進められており、生徒への発問が少なかったように感じる。また、生徒に板書をさせた際に間違いやすい点を全員で共有させるなどの工夫がほしかった。さらに、机間指導をするなど生徒の理解度を把握する配慮がほしかった。もっと生徒が授業に参加する機会を増やす工夫が必要ではないかと思われる。

ノートをきちんと書いている生徒や意欲的に取り組んでいる生徒がいる反面、教師の問いかけに声を出さない、反応のない意欲不足の生徒や寝ている生徒もおり、集中力不足が指摘された。また、内容が難しいせいかほとんど計算ができておらず、生徒の計算力不足が感じられた。

●４班　【２年環境科　漁業　畠山康治先生】

本時の目標が明確にまとめられ、前回の復習や授業の進行スピード、授業のまとめなど授業の構成が良かった。また、船川丸を例にとった説明が分かりやすく、生徒を引き入れる雰囲気で進められていた。板書についてはシンプルで見やすい反面、もっと工夫するとインパクトのある授業になったのではないかという意見もあった。しかしながら、机間指導が少なく、一方通行ぎみな授業の感じもあり、生徒への発問の時間があればもっと盛り上がるのではないかという指摘があった。

生徒に関しては、全員が一体感をもって授業に臨んでおり、また、授業への反応も良くノートもきちんと書かれていた。しかし、後ろを向いての私語や一部寝ている生徒がいるなど集中できていない生徒もいた。生徒が興味を持つ授業を行うためには、授業内容をもっと精査することや可能なものであれば実物を提示し興味を引く工夫などをしてほしい。

●５班　【２年科学科　通信工学　鎌田亨先生】

生徒は積極的に問題プリントに取り組んでおり、分からないことでもグループで相談したり、先生や友人に聞いたりしていた。実験に対しても興味を大いに持っていた。しかし、集中力に欠ける生徒もおり、関心意欲のある生徒とない生徒との差が大きかった。

教材教具に関しては、具体的なものや道具で視覚に働きかけており、モデルを使って生徒に作業をさせるなど注意を引く工夫がされていた。また、磁石の簡単な実験を丁寧に見せているのも良く、図を使っての指導は分かりやすかった。

また、本時の目標が明確であり、板書が丁寧で声が大きく聞きやすいといった指導の基本ができていた。しかし、私語をしている生徒や授業を受ける姿勢の悪い生徒などへの指導が少なかったという指摘があった。

わかる授業への「鍵」として、時間配分、座席の決め方、教科書の使用などの点があげられる。

●６班　　【２年科学科　水産食品管理　鎌田美津子先生】

生徒の積極的な発言が多く、活発であった。また、他の生徒の発表をきちんと聞いていた。指導者は、生徒の質問にも丁寧に答え、発言しやすい発問や助言を与えているのが良かった。さらに、生徒の発言をひろったりまとめたりしていることや、発言の仕方を指導している点も良かった。また、生徒はしっかりとノートをとっており、作業に集中して取り組んでいた。

机間指導では個々をよく観察しており、授業の途中でも復習を入れながら進んでいるのが良かった。また、時間内で授業内容がおさまっており、板書の字も大きく見やすかった。しかし、板書は単調でメモ書きに近く工夫が必要であるとの指摘もあった。起立して発言する生徒の声が小さかった。

●７班　　【１年環境科 水産基礎 岩谷裕次先生】

声が大きく聞き取りやすい授業で、身近な話題を取り上げているのが良かった。特に、パワーポイントを使ったプレゼンが分かりやすく、教材研究に独自の工夫がされていた。しかし、生徒の作業中に話かけたり、プリント配布のタイミングが悪かったりと指示の出し方に注意を払ってほしい点があった。また、机間指導をよくやって生徒一人ひとりの把握に努められており､生徒との会話量も適切であった｡時間的にも計画通りに進んでいた。

生徒は授業態度がよく全員が積極的に取り組んでおり、意欲的に発言するなど反応が良かった。しかし、思い付くままの発言も中にはあり、後半は授業への集中力がなかった点が残念であった。

●８班　【１年科学科　水産食品製造　畠山浩樹先生】

発問が多く、生徒の関心をひいている。また、会話形式で生徒との対応ができており、信頼関係がある。質問に対し起立して答えさせるなど授業態度の指導がなされており、節度ある授業展開である。

生徒の反応としては、積極的に発問に答えているが、発言が一部の生徒に偏っており、反応の少ない生徒への働きかけがもっと必要ではないかという指摘があった。また、生徒の発言を板書にするなど授業の展開に生かす工夫がほしいところである。

生徒の良い点としては、落ち着いて授業に臨む態度が素晴らしく、懸命にノートやプリントへの記入をしていたが､中には集中力が続かない生徒もおり､私語が時々見られたり、ノートの書き取りを諦めてしまったりする生徒もいる。おとなしい生徒がどの程度理解しているのか疑問であるとの意見が出された。

指導者は、生徒を良く見て適切に指名しており、生徒が授業から脱線し始めても雰囲気を悪くせずに授業に引き戻している。また、分かりやすい表現で説明されていたのが良かった。今後の課題としては、生徒の作業状態を見るために机間指導がもっと必要であることや､板書の色使いを赤よりは黄色を多用した方が効果的であるといった意見も出された。

授業の創造と探究

Ⅲ　校外研修

高等学校教職１０年経験者研修講座

平成２３年度

教職１０年経験者研修のまとめ

受講者番号	１４	学校名	秋田県立男鹿海洋 高等学校	氏名	鎌田　美津子

秋田県総合教育センター

1　共通研修

本研修は本県の教育課題や学校経営の基本など中軸を担う教員としての使命感の確立を目指して設定されたものです。

○本県学校教育の現状 ○学校の危機管理 ○公開講演 「質の高い授業研究を継続的に進めていくための方略」	○イブニング・セミナー ○学校全体で取り組む情報教育 ○キャリア教育のあり方	□本県の教育課題とこれからの学校教育（１月） □教育公務員の服務（１月） ＊以上２つは最終日

（1）この研修の中で最も役に立ったと思う内容について簡単にまとめてください。

内　容	公開講演 「質の高い授業研究を継続的に進めていくための方略」
専門教科を教えているため、今までの授業は知識の供与に偏ることもあった。生徒を動かし、意欲的に授業に臨ませるための工夫や、教材の自主製作など、怠らずにやっていきたいと感じた。 しかし、高校で学んだ内容が社会で活かされている例を挙げても、学校の枠の中で生活している本校生徒にとって、どれほど理解されて、授業に意欲的になるのか疑問も感じ、より一層の教材研究や授業への工夫が必要なのではないかと思った。	

（2）この研修の中で，これからの自分に必要であると感じ，さらに研修を深めたい内容について一つを挙げ，その理由を書いてください。

深めたい研修	本県学校教育の現状
秋田県の児童・生徒の現状は全国的に良いと見なされていることが多いが、よくデータを見れば決して良いと言える状況ではないことが衝撃であった。特に中学校の不登校は増加傾向にあることが分かり、生徒一人一人がより充実した高校生活を送るためにも、本県の学校教育の現状を知り、様々な生徒への対応の仕方を考えておく必要があると思った。 また、秋田県は少子化傾向にある為、児童・生徒に対してより良い教育を与え、将来秋田に残る若者を増やしていくことができるようにもしていきたいと思った。	

2　教科指導等研修

本研修は，主に教科指導に関して，１０年を経験した教員として達成が望まれる内容について研修を行うものです。中軸を担う教員にふさわしい指導観及び指導技術等実践的な力量の確立を目指します。

○これからの高等学校に求められる教科指導 のあり方

（1）この研修の中で最も自分に役に立ったと思う内容について簡単にまとめてください。

内　容	これからの高等学校に求められる教科指導 のあり方
新学習指導要領の改訂部分の確認ができた。それに伴い、本校では教育課程の編成に取り組んでおり、育てたい生徒像や必要な科目、設備、現存する施設設備で可能な学習および実習内容などを考えていくことができた。 さらには、産業構造の変化、技術の進捗等に柔軟に対応できる人材の育成や水産科の目標を確認し、興味・関心、目的意識を持たせること、社会の発展を図る創造的な能力と実践的な態度を育てていくために必要なことを考え直すことができた。	

（2）この研修の中で，これからの自分に必要であると感じ，さらに研修を深めたい内容について一つを挙げ，その理由を書いてください。

深めたい研修内容	これからの高等学校に求められる教科指導 のあり方
生徒の実態に合わせた授業の進め方を振りかえることが大切だと感じた。教師が意図した質問と異なる解答をする生徒がいたり、予想しなかった解答をする生徒もいたりする。そのため、生徒の学力把握と共に授業の進め方を改めて考えることが大切だと改めて感じた。 使用している教科書は地域とかけ離れている部分もあり、地域の水産業について取り扱い、興味・関心を持たせ、意欲的に授業に取り組ませるためにも、男鹿を始め、秋田や日本海側の水産業に関する教材研究や自作の教材などを用いていくことも大切だと思った。	

3 生徒指導等研修

本研修は，生徒指導，教育相談，学級経営など中軸を担う教員にふさわしい指導観と児童観の確立を目指すものです。

○生徒指導理解と人間関係づくり ○教師が使えるカウンセリングの技法	○事例を通してみた問題行動・不登校・いじめへの具体的な指導

（1）この研修の中で最も役に立ったと思う内容について簡単にまとめてください。

内　容	教師が使えるカウンセリングの技法
生徒役、教師役になってカウンセリングをしていくことで、話をする生徒がどのような気持ちになるのか、改めて知ることができた。話を聞いてもらいたい生徒の方を向くのか、仕事をしながら横を向き、生徒の話を聞くのか、によって相手の感じる気持ちはまったく異なることを知ることができた。 カウンセリングの技法をしっかりと身につけ、生徒の指導に応用していけるように努めたい。また、授業の中での生徒からの質問や、授業の進め方にも活かしていけるよう今後も努めていきたい。	

（2）この研修の中で，これからの自分に必要であると感じ，さらに研修を深めたい内容について一つを挙げ，その理由を書いてください。

深めたい研修	生徒指導理解と人間関係づくり
生徒が感じていることを教師はきちんと受けとめることができているか、教師の気持ちを生徒へきちんと伝えるためにはどうするか、と考えさせられた研修であった。 生徒から「先生たちは怖い」等の話を聞くことがある。生徒を育てていくために、生徒理解が大切であり、生徒との人間関係づくりも大切だと改めて思った。また、一概に、枠の中に収めて生徒の個性を判断する前に、一人一人の生徒理解が大切であると思った。研修を重ね、普段の指導や授業に活かしていけるようにしたい。	

４　総合教育センター「教職１０年経験者研修」を受講しての感想や意見を書いてください。

教科や生徒指導など、現在までの研修や経験の中で学んできたことも多かったが、センターでの研修を受講し、きちんと確立されたものになっていったと思う。特に、カウンセリングの技法や生徒理解について、普段生徒が感じていることを知ることができたと思う。教科研修は秋田県の水産教育や今後の水産について考え、育てたい生徒像を明確にするために、現在の状況や水産の目標を確認することができた。特に、本県学校教育の現状や情報教育は、変化の早い情報をキャッチし、生徒が健全に生活できるように指導していかなければならないと感じた。

また、学校の危機管理についてやキャリア教育についてなども、学校全体として取り組まなければならないことであり、１０年を経過した教員にふさわしい内容だったと思う。中堅教員として研修で得たことを活かして、学校運営の中核として働いていけるように頑張っていきたいと思う。

今後は、学校に必要な研修を積極的に受講して、自分に不足している部分を見極め、質の高い指導力を身につけていきたいと思う。

5　これからの５年間を見すえた研修計画の作成

（1）　研修計画を作成するに当たっての自己評価

別添「自己評価シート票」に基づき，各評価項目について自己評価を行ってください。それを基にして，自らの資質能力の向上のための今後５年間を見通した研修計画を作成します。

各評価項目の評価は，到達目標を念頭に置きながら，次に示す能力の程度に従い，当てはまる記号を記入してください。

Ａ：評価基準を十分に達成している。
Ｂ：評価基準をおおむね達成している。
Ｃ：評価基準に照らして，不十分である。

（2）　研修計画の作成

これから５年程度先を見すえて，研修を進めるに当たって自らの課題を踏まえた目標を設定し，具体的に取り組みたい事項を記入してください。

番号	１４	学 校 名	秋田県立男鹿海洋高等学校	氏　名	鎌田　美津子

研　　修　　計　　画

	教科指導	生徒指導等	学級経営等	道徳・特活・総合・進路指導等
目標	生徒の個々の能力に応じた教科指導	生徒理解に努めたカウンセリングと生徒指導	生徒自らが積極的に活動する学級をつくる	生徒が自主的に進路を選択できるようにする
具体的に取り組みたい事項	①教科書の内容・教材を吟味する授業中、発表の機会を増やす ②単元毎に少テストやレポートを実施する ③生徒の学力把握を行う ④良くできている部分を褒め、理解が不足している部分を助言する ⑤①～④を繰り返す	①生徒との面談を実施する ②生徒の行動をよく観て、生徒に声かけをする ③傾聴を心がける ④カウンセリングの状態なのか、コーチングの状態なのか見極め、生徒と話す ⑤保護者や他の職員と協力する ⑥①～⑤を繰り返す	①生徒理解に努め、生徒の個を把握する ②生徒同士が良い関係を築ける雰囲気作りに務める ③レクリェーション等に参加させる ④生徒に一人一役の係を決め、仕事をさせる ⑤生徒同士が助言できるよう促す ⑥①～⑤を繰り返す	①教科指導・体験学習を通し、生徒自身の自己分析を少しずつ行わせる ②卒業生等の体験を伝える ③職業について調べさせる ④必要な資質や資格を調べさせる ⑤生徒自身の進路希望を考えさせる ⑥①～⑤を繰り返す

秋田県公立学校教職経験者到達目標

1　設定の経緯

「秋田県公立学校教職経験者到達目標」は、平成15年度の10年経験者研修の法定化を機に、初任者研修・５年経験者研修・10年経験者研修終了時における，本県の全ての教職員に求められる能力・適性等を明確にするために設定された。

本研修体系の改訂に伴い，教職経験者研修等における研修のねらいの一層の明確化と研修内容の充実を図るため，これまでの到達目標を次のように見直し，改訂する。

(1) 10年経験者研修終了時まで，個々の状況に応じてより長いスパンで研修に取り組めるよう，初任者研修・10年経験者研修終了時の内容に絞って再編集する。

(2) 記載内容の精選を図り，到達目標の一層の意識化を進める。

なお，10年経験者研修終了後は，置かれた状況や役割に応じて各自が目標を設定し，授業改善・学校運営の改善に生かされる専門的実践力を身に付けることが求められる。

2　活用の具体例

(1) 市町村教育委員会としての活用

①管下の学校及び教職員に対して，人事評価システム（平成18年度実施）との関連を図りながら，到達目標を念頭においた指導を行う。

②特に，10年経験者研修の研修教員の評価に当たっては，到達目標に基づいて評価項目が設定されていることに留意する。

(2) 管理職としての活用

①自校の教職員に対して，人事評価システムとの関連を図りながら，到達目標を念頭においた指導を行う。

②特に，10年経験者研修の研修教員の評価に当たっては，到達目標に基づいて評価項目が設定されていることに留意する。

(3) 各主任等としての活用

①校内研修の企画及び実施に当たっては，研修を通して各教職員が到達目標に近付くことができるよう内容等を工夫する。

②10年経験者研修の研修教員の評価に当たって，校長等から参考意見等を求められた際には，到達目標に基づいて適切な判断をする。

(4) 教職員個人としての活用

①目標への到達を目指して，積極的に自己研修に努める。

②校内・校外における様々な研修においては，事前に到達目標に照らして自己評価するなどして，目的を明確にして研修に臨む。

3　10年経験者研修終了時までの到達目標

※表中の「小中高」は小学校，中学校，高等学校を表す。「特支」は特別支援学校を表す。

				初　任　研	10　年　研
教科等指導	教科等の専門性	小 学 校		全ての教科，総合的な学習の時間及び外国語活動の指導目標や指導内容について理解し，指導に必要な基本的事項を身に付けている。	全ての教科，総合的な学習の時間及び外国語活動について，中学校との関連についての理解を深めるとともに，周りの教員に専門的な指導上の適切な助言をすることができる。
		中 学 校		担当教科及び総合的な学習の時間の指導目標や指導内容について理解し，指導に必要な基本的事項を身に付けている。	担当教科及び総合的な学習の時間について，小学校や高等学校との関連についての理解を深めるとともに，周りの教員に専門的な指導上の適切な助言をすることができる。
		高等学校		担当教科及び総合的な学習の時間の指導目標や指導内容について理解し，指導に必要な基本的事項を身に付けている。	担当教科及び総合的な学習の時間について，中学校との関連についての理解を深めるとともに，周りの教員に専門的な指導上の適切な助言をすることができる。
		特別支援学校		全ての教科等について，指導目標や指導内容を理解し，児童生徒の障害や発達の程度に応じた指導に必要な基本的事項を身に付けている。	担当教科等において，障害や発達の程度に応じた指導について，周りの教員に適切な助言をすることができる。
	構想・計画	単元構想 授業計画		年間指導計画に基づき，各単元の学習指導計画及び学習指導案を作成することができる。	学校教育目標の実現に向けて，他教科や道徳，特別活動，総合的な学習の時間との関連を考慮した年間指導計画とそれに基づいた各単元の学習指導計画及び学習指導案を作成するとともに，周りの教員に対し，単元構想・授業計画に関わる適切な助言をすることができる。
		教材研究		指導目標や指導内容を十分に理解し，授業の準備をすることができる。	校内研修会や各種研究会の中核として，研究推進に携わることができる。協議等でも教材準備・開発等に関わって積極的に発言する。
		個別の 指導計画 (特別支援学校)		各種検査を実施して，児童生徒の特別な教育的ニーズを把握するとともに，保護者の要望等を考慮しながら，指導教員の指導の下に，自校の書式に合わせて個別の指導計画を作成することができる。	周りの教員に対し，保護者の要望や児童生徒の実態に応じた個別の指導計画作成や，その実践に関して適切な助言をすることができる。
	授業実践	指導技術	小中高	発問，板書，教具・機器の活用，ノート指導，机間指導など基本的な技能を身に付け，それらを生かして授業を進めることができる。	児童生徒の学習状況に応じて，工夫しながら臨機応変に授業を展開し，指導のねらいを達成することができる。
			特支	児童生徒の障害の状況に対応する基本的なコミュニケーションの理論と方法を理解し，身に付けている。	児童生徒の学習状況に応じて，工夫しながら臨機応変に授業を展開し，指導のねらいを達成することができる。
		個への対応		児童生徒一人一人の興味・関心や習熟の程度を考慮し，適切な学習課題を準備することができる。	児童生徒の実態を踏まえ，適切な手立てを講じて指導するとともに，補充的な学習，発展的な学習を計画・実践することができる。
	評価	評価についての理解 児童生徒理解 評価の活用		観察法やテスト法など，評価に関する基礎的な内容と方法を理解して活用し，評価を次時の授業に役立てることができる。	観察法，質問紙法，テスト法，ポートフォリオ評価など各評価方法の特性や評価規準の作成について理解し，一人一人の学習状況を把握するとともに，周りの教員に対し，評価の進め方・生かし方について適切な助言をすることができる。

		初　任　研	10　年　研
学級経営等	学級経営案 学級経営の評価	指導教員の指導の下に学級経営案を作成し，それに基づいて学級経営に取り組むとともに，評価項目に沿って学級経営の評価ができる。	学校の教育目標を具現化するという視点から作成した学級経営案に基づいて学級経営を進め，多様な評価方法で多面的に学級経営の評価ができる。また，指導への評価の生かし方等について，周りの教員に適切な助言をすることができる。
	児童生徒理解	児童生徒とコミュニケーションを図り，一人一人の考えを把握するとともに，それぞれが発するサインに気付くことができる。	児童生徒とコミュニケーションを図り，一人一人の考えや集団の中での個々の様子を把握できる。また，周りの教員に対し，児童生徒が発するサインの把握の仕方等に関する適切な助言をすることができる。
	家庭との連携	家庭とのコミュニケーションを適切にとることができる。	様々な手段を用いて家庭との連携を図るとともに家庭との関わり方等について，周りの教員に適切な助言をすることができる。
	道徳教育 特別活動 進路指導	指導教員の指導の下に，全体計画や年間指導計画などに沿って，学習指導案を作成して授業を進めたり実践したりすることができる。	学校の教育活動との関連を明確にした年間指導計画を適切に作成するとともに，教育目標の具現化に向けた全体計画の作成に参画し，計画に基づいて実践することができる。

			初　任　研	10　年　研
生徒指導	生徒指導	生徒指導	児童生徒の実態や行動の変化に目を向け，指導教員の指導の下に，適切に生徒指導に取り組むことができる。	児童生徒の実態等をとらえ，保護者や地域社会の理解と協力を得て，適切に生徒指導に取り組むとともに，生徒指導全般に関して，周りの教員に適切な助言や援助ができる。
		いじめの防止と対応	いじめについて理解を深め，指導教員の指導の下に，いじめの未然防止や早期発見に努めることができる。	日常の児童生徒との触れ合いや観察・調査などから，きめ細かな実態の把握に努めるとともに，いじめについて研修を積み重ね，周りの教員に未然防止や早期発見のための適切な助言ができる。
			いじめられる側・いじめる側本人とその双方の保護者に対し，周りの教員の協力を得ながら適切な指導や援助に努めることができる。	いじめへの対応で困っている教員への適切な助言や，いじめられる側・いじめる側本人とその双方の保護者に対して，適切な事例を基に指導や援助ができる。
		不登校の防止と対応	不登校について理解を深め，指導教員の指導の下に，不登校の未然防止に努めることができる。	早期の教育相談を実施するなど，不登校の未然防止のために迅速で適切な対応ができるとともに，不登校について研修を積み重ね，周りの教員に未然防止のための適切な助言ができる。
			指導教員の指導の下に教育相談を行うなど，再登校に向けた取組に努めることができる。	不登校児童生徒に関わる教員への適切な助言や，不登校児童生徒及びその保護者に対して再登校に向けた適切な指導や援助ができる。
		問題行動	様々な問題行動とその背景について理解を深め，指導教員の指導の下に，その未然防止に努めることができる。	問題行動とその背景の理解や様々な対応について研修を積み重ね，児童生徒や保護者へのの受容と共感に基づく適切な指導や援助ができるとともに周りの教員に適切な助言ができる。
	教育相談	教育相談	教育相談の意義について理解を深め，指導教員の指導の下に，児童生徒理解や問題解決に向けた相談活動に努めることができる。	教育相談の在り方や様々な技法などについて研修を積み重ね，それを生かした実践をするとともにに周りの教員に適切な助言ができる。
		学習上特別な配慮を要する児童生徒	ＡＤＨＤやＬＤ等について理解を深め，指導教員の指導の下に，学習上特別な配慮が必要な児童生徒について，適切な対応に努めることができる。	ＡＤＨＤやＬＤ等の学習上特別な配慮が必要な児童生徒の理解や指導について研修を積み重ね，児童生徒や保護者への適切な指導や援助ができるとともに，周りの教員に適切な助言ができる。

		初　任　研	10　年　研
ふるさと教育・キャリア教育・情報教育	ふるさと教育	学校区を中心とした地域の自然・歴史・文化・人材等に関心をもち，各教科等の教材に取り入れるなど，ふるさと教育の趣旨を理解して教育活動に取り組むことができる。	学校の教育活動との関連を明確にした年間指導計画を適切に作成するとともに，教育目標の具現化に向け，キャリア教育の視点を重視したふるさと教育の全体計画の作成に参画し，計画に基づいて実践することができる。
	キャリア教育	キャリア教育の趣旨を理解し，学齢や発達の段階を踏まえた体験活動を充実させるなど，教育活動全体を通じたキャリア教育に取り組むことができる。	学校の教育活動との関連及び他校種との連携の在り方を明確にした年間指導計画を適切に作成するとともに，教育目標の具現化に向け，ふるさと教育が目指す人間像を考慮に入れたキャリア教育の全体計画の作成に参画し，計画に基づいて実践することができる。
	情報教育	情報活用能力育成の基本的な考え方を理解し，その育成を目指した授業を実践するとともに，図書情報やインターネット情報などの情報手段を活用した授業を実践することができる。	学校の教育目標を具現化するという広い視野から情報教育を捉え，主任等と連携し情報教育の全体計画や年間指導計画を作成するとともに，様々な情報手段の特性を効果的に生かした授業実践や，保護の必要のある情報と積極的に公開すべき情報の見極めと管理ができる。

		初　任　研	10　年　研
学校経営	校務分掌	自己に与えられた校務の内容を把握し，組織の一員として正確かつ協力的に遂行できる。	分掌した校務について年間計画を作成し，他の分掌と連携を図りながら企画や運営をするとともに分掌組織全体を把握して，周りの教員に適切な助言ができる。
		校務を遂行する上で生じた課題について認識し，報告・連絡・相談することができる。	学校経営上の諸課題に対し，建設的な改善策を提案するなど，学校運営に積極的に参画できる。
	教育課程の編成	自校の教育目標や教育課程の特色，教育課程実施上の課題を理解することができる。	児童生徒の実態や地域の実情を把握し，教育課程実施上の課題を見つけることができるとともに，自校の教育目標に沿った教育課程の立案に参画できる。

様式２

選　択　研　修　計　画　書

研修教員	鎌田　美津子	所属校	秋田県立 男鹿海洋高等学校	連絡先	TEL　0185-23-2321 FAX　0185-23-2322
ね ら い	水産に関する幅広い識見を会得し、生徒の教科指導に役立てる。				
研 修 先	秋田県農林水産技術センター 水産振興センター	所 在 地	〒010-0531 男鹿市船川港台島字鵜ノ崎８－４ TEL 0185-27-3003　FAX 0185-27-3004		
代表者名	工藤　裕紀	正式職名	所長		
担当者名	水谷　　寿	部・課名	企画管理班		

月日（曜）	研修時間	内　　容
第１日 ７月５日 （火）	9:00 ～12:00 12:00 ～13:00 13:00 ～17:00	放流用種苗（トラフグ）の標識装着作業 休憩 天然海域及び市場における放流魚追跡調査
第２日 ８月６日 （土）	9:00 ～12:00 12:00 ～13:00 13:00 ～17:00	一般公開イベントにおける準備・スタッフの補助等 休憩 一般公開イベントにおけるスタッフの補助・後片づけ等
第３日 ８月１９日 （金）	9:00 ～12:00 12:00 ～13:00 13:00 ～17:00	秋田県の水産業に関する講義の受講 休憩 魚類の査定・測定等水産研究に関する実技研修

様式３

選　択　研　修　報　告　書

所　　属　　校	秋田県立男鹿海洋高等学校	職・氏名	教諭　鎌田　美津子
研　　修　　先	秋田県農林水産技術センター　　水産振興センター		
研　修　期　間	平成２３年７月５日（火）、８月６日（土）、８月１９日（金）		

１　研修の概要

７月　５日（火）秋田県沿岸・沖合の魚介類について講義
千秋丸による漁獲物の精密測定
県産魚類の検索・同定、ハタハタ耳石の標本作製
海水のｐＨ測定

８月　６日（土）水産デー　　一般者見学の為の諸準備および手伝い
八郎湖の水質調査、アオコ発生の原因プランクトン展示
淡水魚の展示・・・ヤマメ・サクラマス・カジカ（大卵生・小卵生）など
海藻の押し花製作、お魚標本作り、耳石の工作、水産物パズル、お魚クイズ

８月１９日（金）講義・実習・見学
最近の水産学の知見（水産資源学、陸水学、水産増殖学）、筆記試験
お礼の挨拶

２　研修の成果

魚類の全長・体長・体重・生殖巣量を測定すると、魚類の成長を知ることができ、それが今後の漁獲の予想につながることが分かった。例えば、ヤナギムシガレイは９月頃に漁獲されることが多いが、小さなサイズの物も多く漁獲されている為、初産卵する前に漁獲されて資源の増加が期待できない可能性があった。その為、資源回復の方策を取られていることも知った。また、情報不足種として扱われている鳥にカワウがあるが、アユなどの重要な魚を食べ、その被害の拡大が懸念されていること、ブラックバスなどの外来魚の再放流が法律で禁止されていることも学習することができた。

水産デーでの研修は、自分自身も海藻標本製作や淡水魚の名前、パズルによる水産物の特徴を改めて知ることができた。１０時公開とともに多くの見学者が訪れ、小学生以下の子供を連れた家族が多く、２５０名を超す来場者があり、過去最高の来場を記録したと伺った。水産に興味を持つ子供たちが増えてくれればいいと思った。

更に、講義の中で、海水温の経年変化がブリ・マダラ・スケトウダラなどの水産物の漁獲量に影響していることや、水産物の成長指数と漁獲量の関係を示すデータをそれぞれ知ることができ、とても参考になった。

秋田県の水産物漁獲量は、４７都道府県の中でも下位にあると分かり、秋田県の水産業の厳しさを感じた。しかし、ハタハタの資源回復のための調査や方策から、水産に携わる方々の強い意識を改めて知ることができたこと、千秋丸の調査等から様々な魚種が水揚げられていることを知り、それらの水産資源を有効利用していくことが大切であると水産高校の教員として実感した。これからの授業にぜひ活かしていきたい。

様式４

特 定 課 題 研 究 レ ポ ー ト

所　属　校	秋田県立男鹿海洋高等学校	職・氏名	教諭　鎌田　美津子
研 究 分 野	(A) 教科指導　B 学級・学年・学校経営　C 生徒指導 D 進路指導　E 特別活動に係る指導　F 総合的な学習の時間に係る指導　G 特別支援教育に係る指導　H その他		
研 究 テ ー マ	地域に根ざした教材の研究と魅力ある授業づくり		

１　研究の概要

水産教育に関する教科書には、全国に共通する内容の記載が多く、生徒は標準的な知識を身につけることができる。しかし、地域の水産業の担い手を育成するには、生徒が地域の海や海洋生物に対して、興味や関心を持つような魅力のある水産の授業を展開することが必要と考えた。生徒は、近くに海があるにもかかわらず、海洋生物の観察や採集などの体験が少なく、地域の海に生息している海洋生物をほとんど知らない。そこで、地域に根ざした水産を学ぶ入り口として、生徒が意欲的に取り組む授業づくりについて研究した。

２　成果と課題

成果

（１）教材について

学校周辺の地図から、男鹿の地形や海洋生物について調査する地点を決めた。調査の際は、主に写真撮影やメモによって記録し、自然の風景や海洋生物について記録した。海洋生物については岩場に降りたり波打ち際へ行くなどして、どんなところに、どのように生息しているのか、特徴となる部分を探して記録するように努めた。また、参考文献や書籍による資料調査も行い、より詳しく授業へ活かせるようにした。

（２）授業へ活用

記録したものを一部利用して、１年水産基礎の授業に使用した。テキストの内容に沿いながら授業をすすめていった。教科書を読み説明を聞き、ノートを取るなどして、授業態度は概ね良好であった。教科書は海・船・水産物について初歩的な内容を扱い、水産について初めて学ぶ生徒には取り組みやすい内容であると感じていたが、専門的な内容まで掘り下げて授業を行わないと生徒の印象は薄いと感じていた。

教材として地元のことを取り上げた時、地元の風景写真や海洋生物の写真や説明、撮影箇所を伝えたときは、生徒は驚いた様子を見せたり、感想を話し合ったりするなど、生徒の興味・関心が引きつけられたと感じる場面が多くあった。また、授業後の生徒の感想には、「地元の内容が初めて分かった」「写真を見ることができて良かった」「見た目は気持ちが悪いと感じられる海洋生物が本当に利用できるのか疑問だった」「水産物の利用と地域の活性などを考えていければ良い」などと書かれていた。地域の内容を取り上げて、生徒の興味・関心を引きつけ、意欲的に学ぶ姿勢を作ることの重要性を実感した。

課題

興味・関心を引きつけ、生徒が意欲的に学ぶ姿勢を作ることができたのは良かったが、生徒に知識を定着させ、生徒自身が応用させるための方策については準備不足であった。地域のために学校の活動が様々な形で求められており、生徒の活動を活かせる場面をもっと増やしていかなければいけないと感じている。

また、記録した写真やメモを教材として利用できるようにするためまとめておいたが、選定した調査地点は、岩場などのため足場が悪く簡単には降りられなかったり、写真を記録として残せなかったところもある。そのため、口頭での説明になってしまったが、他の教材を活用する工夫も必要であると感じている。魅力ある授業づくりと生徒の活動を活かしていくために、本研究の良かった点や改善点を、今後さらに応用していきたい。

（Ａ４判１～２枚程度、研究にかかわる資料等があれば添付すること）

「学年経営における自校の課題とその対応」

学校番号	１７	学校名	秋田県立男鹿海洋高等学校	記載者	教諭　加 藤 範 昭

１　学年の概要（第２学年）

・普通科２クラス、海洋環境科・海洋科学科各１クラスの４クラス（男子９１名、女子４３名、計１３４名）からなっている。学年の職員は学年主任、副主任（担任を兼務）学年担任、副担任４名、共通担任２名の計１１名で構成されている。

・学年目標　・・・明確な進路目標を設定し、その実現に向けて取り組む

①　学力・就職力の向上をはかる

②　コミュニケーション能力の伸長をはかる

③　人権尊重・社会規範を守る心の育成をはかる

２　学年経営における課題とその対応

課題１　基本的な生活習慣の確立

（状況）

・ここ数年の全職員による朝の整容指導により、生徒の整容面はだいぶ改善されてきているが、一部の生徒ではあるがその場だけ取り繕えばいいような考えの生徒もいる。また衣替えになり、着こなしが悪い生徒が目立つようになってきた。

・車の通行の妨げになるような登下校の通学状態や列車内での乗車マナーなど、社会生活を営む上でのルールやマナーなどの規範意識の薄い生徒がいる。

・家庭環境や経済状況に不安のある生徒が多い。

（対応）

①朝の整容指導と同時に、一人一人と挨拶を交わすなどコミュニケーションをとり自覚を促している。また、授業における生徒指導、定期的な整容検査の実施、違反している生徒にはその場で注意して直させるなど、普段から指導の徹底を図る。

②生徒指導部・学科・部活動の顧問や事務部など、学年を超えた協力体制と、学年間の共通理解のもとに根気強く指導を続ける。

③全校集会や学年集会を通じて、規範意識を高める指導を行う。

課題２　学力・就職力の向上

（状況）

・生徒の学力差が大きく、基礎学力が不足している生徒も多い。また、中学時代から家庭学習の習慣が身に付いておらず、明確な進路目標をもっていない生徒も多い。

（対応）

①わかる授業を実践し、学習意欲の向上に努める。年２回校内研究授業を実施し、研究協議の充実をはかり、学校全体で指導力の向上に努める。

②教務部で、欠点所有者に対して学習シートを配付し、授業での活動状況や家庭での学習状況が確認できるような指導を行っている。

③進路への意識を早期に持ってもらいたいと考え、例年１１月に行っているインターンシップを７月に実施することにした。これにより２年次の夏季休業の効果的な活用方法を生徒に促したい。

④朝学習で国語（漢字)、英語（単語)、数学（計算)、新聞記事の切り抜きを読み感想を書く、を実施して基礎的な学力の向上を図るとともに読解力・社会的教養を身につけさせている。

⑤資格取得を奨励し各学科・各教科で担当者を決め補習等を行っている。

課題３　コミュニケーション能力の向上

（状況）

・自分に自信がないためか、自分の意見を相手に伝えることを苦手とし、望ましい人間関係を気づけない生徒もいる。

（対応）

①年数回実施している学校全体での面接週間や、日常行われている担任や教科担任、部活動顧問、学年部の職員とのコミュニケーションをもつことで改善を図っている。

②各クラスとも全員に係を割り当てることで、生徒に責任と自覚を持たせると共に、生徒を褒めて・励まして育てていくことを心がけている。

課題４　生徒の部活動未加入と保護者の学年ＰＴＡや総会への参加者の少なさ

（状況）２年生の部活動加入率３２．８％
　　６月２０日の２年ＰＴＡの参加者　２５／１３４

（対応）

・今のところ対応策はない。部活動は全員加入の決まりを作るしかないと思う。
実施曜日等の検討や学年ＰＴＡの案内の郵送を実施したが目標に届かず、ＰＴＡ参加者増について何かいい方法を教えていただきたいと思い記載した。

「学年経営における自校の課題とその対応」

秋田県立男鹿海洋高等学校
教　諭　　船木　英也

１．男鹿海洋高校について

本校は、水産課と普通科を併せ持つ統合制高校である。水産科２クラス、普通科２クラスで構成されている。３学年の職員は、学年主任、副主任、学級担任４名、副担任４名、共通担任２名の計１２名で構成されている。

２．生徒の状況と課題について

【学習面】

全体的に学習習慣が身についておらず、授業（５０分）に集中できない生徒が少なからずいる。教室内での学力差が大きく、教科指導にも苦慮している。

課題　・基礎学力の向上
　　・学習習慣の確立

【生活面】

複雑な家庭環境・経済的に厳しい家庭の生徒が多く、遅刻・無断早退などを繰り返す生徒も数名いる。問題行動、生徒同士のトラブルなどは、３年になってからは落ち着いてきている。

課題　整容面の乱れ（女子の茶髪、ピアス、男子の制服の着崩しなど）

【進路面】

進路意識が非常に希薄である。さまざまな進路関係の行事を実施しているが、自分のこととしてとらえていない生徒もおり、参加の姿勢が今一つである。

課題　進路の早期決定

１．具体的な取り組み

【学習面】　・朝学習（数学・国語など）で基礎的な内容を扱い、定着をはかる
　　・教務と連携し、成績不振者への働きかけを実施
　　・資格取得の奨励

【生活面】　・毎朝の挨拶、整容指導の徹底
　　・問題行動への適切な対応と、学年集会やＬＨＲでの予防

【進路面】　・学年主任による全員への面接（５月～７月）
　　・一斉三者面談
　　・面接練習や自己ＰＲ書作成などの指導を含む進路ガイダンスの活用

B-10 高等学校英語科の授業スキルアップ

英語科　戸坂　圭子

1　講座の概要

高等学校英語科の授業において、新学習指導要領の趣旨に沿う、習得と活用のある授業の在り方について研修を行う。

2　対象と定員

高等学校教諭２５名

3　期日

９月１～２日

4　研修内容

１）授業改善の視点について（講義）

新学習指導要領の理念を生かした授業改善について講義があった。そこでは次のようなことが言われた。

中学校では週１コマ授業が増えるが、学習内容では学習単語数の増加が著しい。高等学校では英語で授業を行うことを基本とすることが大きく取りあげられている。しかし、教師が現行の授業を英語で行えばいいというわけではない。今の授業の流れを再確認し、生徒が英語を使用する場面を増やすようにしなければならない。

科目の編成も大きく変わる。採択されなければ教科書はどんどん減る。指導要領解説をぜひじっくり読んでもらいたい。

具体的に授業のスタイルとして３つの授業が挙げられた。予備校型授業では説明がわかりやすく、自分で英文構造がわかるようにすることができる。文章理解型授業は文章を理解することに目標がおかれる。新学習指導要領の理念を生かすにはトレーニング型授業が必要であろう。この授業では教科書の意味がわかった後からが授業の中心である。技能そのものを習得することが目的であり、reproduction, retelling, read and look up など音読・暗唱・暗写の様々な活動が紹介された。しかし、トレーニングはコミュニケーション活動ではないのでその後に自分の思いを乗せられる活動を導入する必要があるとも言われた。中学校ではコミュニケーション活動が多いので高校教員が思う以上に生徒はやれる。今の授業の流れをどのように変えるかが新たな活動を導入する鍵であるとのことであった。

２）生徒の活動を豊かにする授業の工夫

・学習事項の内在化には多くの活動が必要である。音読は英語の基礎回路づくりに役立つ。音読による input を行い retelling や reproduction で output をさせる。段階的に指導する必要がある。output の効果は言語化により「ずれ」に気づくことである。認知を比較することで言語規則の修正へつながる。

・small step をどうつくるか。教材研究は生徒の予習と同じではない。生徒の達成感を大事にする視点が必要である。（授業をパターン化する、書かせたものは集めてコメントを、プリントの工夫など）small step は記憶が不要なものから必要なものへ、音声モデルが有るものから無いものへ単位は短いものから長いものへと組み立てると

よい。５０分で速い英文がわかるように持っていくと生徒は達成感を実感できる。

３）授業改善への取り組み（協議）

３種類の教科書からグループごとに教科書を選び、全員が指導案を作成し模擬授業を行った。普段の授業の教材研究と同様に授業を準備するため、時間をあまりかけずに準備をすることとなった。短時間での授業準備、全員での模擬授業は非常に実践的な研修となった。

４）模擬授業

生徒役で他の先生方の工夫に気づくことができ、教師役で思うようにできない情けなさを感じるなどよい経験をすることができた。講評でくり返し言われたことは英文を理解させるだけではだめだということである。わかることとできることにはギャップがある、そのギャップを埋めることが英語を使える生徒を育てることであるということが身にしみた研修であった。

5　感想

英語教師として２日間という短いながらも充実した研修を受けることができた。参加教員は２０年以上の経験のあるベテラン教員から初任研対象教員まで様々であったが、どの先生もアイデアに富んでおり、授業技術や生徒との対応などいろいろな話をすることができた。細かな授業技術を普段の授業に取り入れていくことができるよう今後も教材研究にしっかり取り組まなくてはと深く考えさせられた。本校英語科職員と話題・教材を共有し授業に取り組んでいきたい。

総合学習センターＣ講座研修報告

ソーシャルスキルやエンカウンターの実践

理　科　　工藤　卓哉

１　参加の経緯

この講座の講師である曽山和彦先生（名城大准教授）は、平成１８年度まで「秋田・学校におけるカウンセリング学習会」を主催していた。私はこの学習会をホームページで知り、機会があれば参加している。学習会は毎月、構成的グループエンカウンターをはじめ、Ｑ－Ｕや教育カウンセリングの技法などをテーマを設定して体験的学習を中心の内容で実施している。曽山先生が名城大に行ってからは１年に１度、学習会において講座を実施しているが、今年度は夏休み中という日程もありセンターＣ講座の参加を希望して参加した。

２　講座の内容

午前は構成的グループエンカウンターの基本的な理論を中心に講義・演習を行った。特に学級開きにおいて、「居心地の良い学級作り」「学級の温かな人間関係作り」を作るために効果的であると話していた。展開としてはインストラクション（導入）でねらいやルールを説明や例示し、エクササイズ（心理的課題）を実際に体験し、シェアリング（分かち合い）で感じたことや気づいたことを共有するという流れである。そこで午後に実際にエクササイズを４人組になって体験した。校種も異なる４人組だったがエクササイズを経験するうちに笑顔で行うことができた。今回実施したエクササイズは「二者択一」（どちらか好きな方に○をし、選んだ理由を話す。）・「ありがとうシート」（自分のほしいものを書いてペアになっている人に渡し、相手から○○をプレゼントしますと言ってもらう）「アドジャントーク」（アドジャンのかけ声で０～５本指を出し、その合計の一の位の数字のトピック（好きな動物など１０種類準備しておく）について話す。）・「いいとこ四面鏡」（いろいろないいところを３０種類準備し（しっかりしている・優しいなど）、同じグループのメンバーから○○さんのいいところは○○です。と３つ発表する。）だった。どのエクササイズも簡単にでき、最終的には「Ｉ　ａｍ　ＯＫ！」の気持ちにさせてくれた。そしてシェアリングで気づいたことを話し合った。

３　今年度の実践

今年度は１年担任となり、学級開きで構成的グループエンカウンターを実施した。「質問じゃんけん」や「ネームトーク」をやってみたのだが、曽山先生のようにうまくできなかった。しかし、友人を作るといった目標はある程度達成できた。ＬＨＲなどでも「いいとこ四面鏡」などを実施したが、生徒がうまく機能しているところとしていないところが見られ、まだまだリーダーとしては技術が未熟であることを認識した。

４　今後の課題

曽山先生から学んだことは構成的グループエンカウンターだけでなく、教育カウンセリングやＱ－Ｕなど様々である。学級経営がうまくいくように自分なりに実施できることを実践した。少しずつではあるが、成果が出てきていると思う。まだ未熟な点も多々あるので、研修を積み重ねて実践に移したい。

総合学習センターＣ講座研修報告

教育相談に生かすカウンセリングの技法

理　科　　工藤　卓哉

１　参加の経緯

本校に赴任して３年目になる。１年の副担任、１年の担任（２年連続）と生徒とのリレーション作りに毎年苦労してきた。別頁に報告した曽山先生の講座には本校赴任前から学習会に参加したりして勉強をして実践してきたが、様々なカウンセリング技法があることから、秋田大学教育文化学部の柴田健教授のブリーフセラピーを用いたカウンセリングの技法を学ぶため、今年度この講座に参加した。

２　講座の内容

本講座の主な内容である「解決志向ブリーフセラピー」とは、「その人の問題や悩みを何とかしようと考えるのではなく、その人の持っている力やその人がこうなりたいと思う希望や願いに焦点をあてる短期療法といわれる心理療法の一つ」である。今では、コーチングや会社経営にも使われる。

「否定的な面よりも肯定的な、解決している、うまくいっている側面に焦点を当てる。」「過去よりも未来に焦点を当てる。」「基本的にはクライアントの行動に焦点を当てる。」「生徒の欠点ではなく、良いところに目を向け、ほめる、評価するという姿勢で臨む。」など、従来のカウンセリングと異なり、カウンセラーが効率的に介入（質問や称賛）していくことが特徴である。

グループワークをいくつかやってみた。ホテルのコンシェルジュになり、決してＮｏといってはならないワーク、写真を見て「強み」とか「すごさ」を探すワーク、ほしいものについて尋ねるワーク、奇跡が起こり問題が解決したときにどのように違った生活をしているかというワークなど、非常に濃い内容であった。

「セラピストはクライエントを変えることはできない。クライエントだけがクライエント自身を変えることができる存在である。」と柴田先生は話されていた。どちらかといえばコーチング理論に当てはまる講義であった。

３　今年度の実践

本校生徒は、自信のない生徒も数多く在籍している。この講義を聴いて、肯定的な面を生徒に還元するよう心がけた。普段ほめられることの少ない生徒も担任との関係で良いリレーションを作ることができた。

４　今後の課題

上記の一方、生活面で学校の指導に従わない生徒に対して、どうしても否定的な面を見てしまい、なかなか肯定的な面を見いだすことができなかった。また、自分の中で担任として何とかしなくてはという気持ちが働いてしまい、「セラピストはクライエントを変えることはできない」という内容の通りにはできなかった。

カウンセリング技法は様々なものがある。今回のようなコーチング理論も学ぶことができたのは良い経験であった。自分はカウンセラータイプの教員であることを改めて認識し、コーチングの能力は不足していると感じた。これ以外でも様々な理論があるので、来年度以降も勉強を積み重ね、経験したことを生徒に還元できるようがんばりたい。

先進校視察報告

海洋科学科　大高　英俊

１．視察研修のねらい

石川県立能登高等学校

・大型船廃船に伴うカリキュラム、諸行事について
・乗組員の配置転換について
・小型船舶の年間利用計画について
・小型船舶操縦士免許の取得について
・平成25年度の教育課程について

静岡県立焼津水産高等学校

・水産流通科の学科構成、教育課程について
・本校の将来構想ついての協議
・アンテナショップの視察、経営について

上記の内容について、本校の廃船に伴うカリキュラム等を検討するための視察を行う。

２．日程・内容

12月5日（月）能登高校訪問

大型船の廃船に伴い、小型船舶（19ｔ）を新設した高校である。遠洋航海・海技教育から小型船舶を利用した沿岸漁業の教育について説明を受けた。

12月6日（火）焼津水産高校訪問

全国の水産・海洋系高校の中で規模の大きい学校である。無線・通信系の学科を廃止し、水産流通系学科を新設した高校である。商業科と水産科の協力で成り立つ学科が人気であり、学力も向上している。

３．研修内容・状況等成果と課題

学校のあり方は一律ではなく、地域や生徒の実情で異なる。本校の「人口がさほど多くなく、大型実習船を持たない水産海洋系高校が提示する将来像・あり方としては妥当」であるとのご意見をいただいた。ただし、保守的な傾向の強い水産教員がこれを納得しているかが重要とのことでした。「６次産業化」のキーワードは教育のみならず、昨今あらゆる場面で使われており、これを活用するのは大変効果的な手法である。

小型実習船を使った実習は京都や小浜が参考になるとのことでした。これに関しては特に、海技士教育に拘泥する教員の意識変革が不可欠であり、地域の海洋環境等に応じた調査研究の柱が欲しいとのことでした。

食品系は最も人を集めやすいうえ、出口も多いことから、学科を設置するのは良いと思います。ただ、製造加工以外の内容はしっかり構築しなくては意味がなく、新製品や特産品の開発はＰＲしやすいものの、継続的に成果を出すのは大変難しい。あまり前面に打ち出すと首を絞めることにならないか？（先生方の能力、連携できる企業の確保、予算の裏づけ、取り組む時間の確保等、課題は多々ある）成果を出せる見通しのある分野が必要。

流通ビジネス科は、焼津水産高校の教員が希望した内容と極めて近い。昨年度末に本校も水産科教員全員で将来構想を検討しましたが、サービス業のくくりで水産海洋系と商業系をまとめようと考えた。ただ、新学科に相当強力なリーダーシップを持ち中心となって

進めていく先生が必要だと思われる。既存科目に無いことから、実習内容の年間計画や、学校設定科目の内容等、決めなくてはならないことが非常に多い。商業教員が簿記やコンピュータの資格検定ばかりになり、水産教員が各自の専門分野から離れられない状態になると機能しない。先生方の覚悟が一番必要な学科だと思われる。さらに、この学科を設置するのであれば、生徒の開発商品や実習製品、企業との共同開発商品などを販売したり、研究成果を発信する「場」が必要で、地域の産業館や停滞する商店街などを使い、生徒が自主的に運営する形で模擬店舗を経営すると良いかと思われる。

キャリア教育は、本校の取組はかなり参考になるかと思う。入学から卒業まで、発達段階に応じたプログラムを設定した。就業体験もかなり緻密に行っている。県内発のデュアルシステムも目玉です。地域産業の方に委員になっていただき「焼津水産高等学校職業教育委員会」も発足。国の指定事業「地域産業の担い手育成プロジェクト」が終了したが、同等の効果が上がるよう、４分の１の予算で全体を構築した。

進学対応は、たとえ少数であっても、水産海洋系の上級学校を目指す生徒に対し、進路達成を支援する体制を用意する必要がと思う。一定レベルの生徒に入学してもらうには、保護者や中学校の先生に伝わる必要があり、国公立への実績が大きい効果を発揮する。

石川能登高校　小型実習船

小型実習船操舵室

小型実習船機関室

小型実習船操舵室

小型実習船 LED 集魚灯

小型実習船居室

ﾌｨｯｼｭﾊﾟﾗﾀﾞｲｽ魚国店舗①

ﾌｨｯｼｭﾊﾟﾗﾀﾞｲｽ魚国店舗②

栽培実習棟

栽培実習棟　ウナギ養殖

小型実習艇

缶詰（空缶）印刷缶

Ⅳ　水産フォーラム

文部科学省指定事業「目指せスペシャリスト」を終えて

目指せスペシャリスト推進委員会
教　諭　　船木　和則

「目指せスペシャリスト」は、文部科学省が日本の産業を支える専門家を育てようと、平成１５年に創設した事業である。この事業は「スーパー専門高校」とも呼ばれ、個性ある教育課程の編成により特色ある学校づくりの実現や「地域に根ざす伝統技術を基盤とし、新しい技術を開発する」など地域産業活性化への貢献が期待されている。さらには、産業界や大学・研究機関の知的財産の有機的連携も重要視されている。

本校では事業を申請するに当たり、県魚「ハタハタ」を選定した。ハタハタは、昭和五十年頃までは約２万トンが漁獲されていたが、平成３年には７７トンまで減少した。そこで漁業者は自主規制により単一魚種として日本で初めて３年間の禁漁に踏み切った。その成果もあって資源は回復したものの、消費量が低迷し魚価は思わしくない。また、県魚でありながら、誤った知識を持っている人も少なくないことから、「ハタハタネットワーク秋田の伝統食品を地域に活かす」をテーマに、自然環境保護と若い世代への消費拡大を目指し、秋田が誇れる水産物としての再発見と地域活性化に全校生徒で取り組んだ。

１　研究開発課題

「ハタハタに関する資源の有効活用、産卵場の環境改善保全及び漁の省力化に関する一連の取り組みをとおした、水産スペシャリストの育成」

２　研究開発の規模

水産科を中心に、全校生徒を対象に実施する。

３　研究の概要

秋田県農林水産技術センター水産振興センターを中心に、男鹿市、秋田県漁業協同組合、男鹿市商工会 、県内大学、秋田県総合食品研究所、秋田県産業技術総合研究セン ター等多くの外部機関との連携を図りながら、短期間に集中的に水揚げされる県の魚「ハタハタ」漁の省力化およびハタハタ資源の有効活用や産卵場の環境保全活動、ブリコ（卵）の保護活動等に取り組み、将来の水産のスペシャリストの育成を目指す。

①　ハタハタの水揚げ作業の省力化を図るための自動選別機の開発研究
②　ハタハタの産卵場としての藻場の再生に関する研究
③　飼育下におけるハタハタの基礎的な生態研究
④　海岸に打ち上げられるハタハタ卵の資源への添加に関する研究
⑤　未利用ハタハタの有効活用に関する研究
⑥　ハタハタの消費拡大につながる新製品の開発
⑦　未利用資源の有効活用に関する研究

４　事業内容

（１）研究実施学科、教育界や産業界等における現状、課題（社会的ニーズ）等

①　平成１８年の秋田県の海面漁業・養殖業の生産量は９９８０トンと多くはなく、決して水産立県とは言えないが、「ハタハタ」や「しょっつる」、「石焼き料理」を

はじめとして、秋田県独自の伝統食文化が発達している。ハタハタ資源は一時期の低迷期を脱し回復しつつあるが、一方で消費の減少や価格の下落という課題も生じている。

② 県の魚「ハタハタ」は海面漁業生産量の約 16.6 %を占め、秋田県民にとってはなくてはならない貴重な魚である。しかし、漁獲されたハタハタのうち、大型の個体や雌魚は重宝されるが、小型魚や雄魚は市場に流通せずに、廃棄されるものも多い。また、秋田県は水産加工業者が少なく、小型のホッケ（通称「ローソクボッケ」）等が加工されることもなく、流通せずに沖で廃棄されている。大量に廃棄される未利用資源や水産加工残渣の有効利用は水産業界の懸念事項である。

③ ハタハタは２～４年の期間を沖合域で過ごした後、１１月下旬から１２月下旬にかけてのごく短期間のうちに深さ２５０～３００ｍの深海から接岸し、海藻に卵を産み付けるが、メスの数に対して海藻が足りなければ、海中に放卵し海岸に打ち寄せられてしまう。藻場の消失によりブリコが海岸に打ち寄せられ、膨大な量の資源が無駄になっているが、一方では、人工採卵・孵化放流を行いハタハタ資源の維持増大を図っている。

④ 「ハタハタ」は大型の個体や雌魚は重宝されるが、小型魚や雄魚は 1/3 ～ 1/100 の値段で取引され、場合によっては大量に廃棄されることすらある。

⑤ 世界的に水産物の需要が増加し、品薄状態と価格高騰を招いている中で、「食」の安全性は今後ますます重要な問題となってくる。地産地消を推進し、地球環境に優しい「調理技術」を研究しながら、水産物の有効利用を進める中で自給率の向上を図る必要がある。

⑥ 男鹿市は「なまはげ」と「温泉」を中心とする観光都市であるが、少子高齢化と地域産業の衰退により、商店街の活力が失われつつある。

（２）目的

① ハタハタ選別機の製作をとおしてのスペシャリストの育成

季節ハタハタ漁は１１月下旬から１２月下旬にかけて、産卵のため接岸するハタタハタを漁獲するものである。水揚げが短期間の間に集中するため、その期間は不眠不休での作業が続く。また、重宝されるのは大型魚や卵（ブリコ）を孕んだ雌魚であるため、手作業で行う選別作業に多大な労力を費やしている。ハタハタ選別機を製作することによって、寒風の中で行われる選別作業の省力化と出荷作業の効率化を研究する。

② 潜水技術等を生かした藻場の再生に関する研究を通してのスペシャリストの育成

ア ハタハタについてはその生態が解明されていない部分が多い。自然界での産卵生態などごく一部については、ダイバー等により映像に残され明らかになっている部分もある。ハタハタを周年飼育している男鹿水族館ＧＡＯと連携し、水槽内で飼育されているハタハタを観察しその生態を明らかにする。

イ 男鹿半島周辺の日本海沿岸はハタハタ産卵場として重要であるが、特に「寒天」の原料となるテングサは他県より多く重要な資源となっている。テングサを中心にツルアラメ、アカモク(ギバサ)、ホンダワラ(ジバサ)などの生息・分布状況や海底地形構造を調査し、ハタハタ産卵場の環境改善保全活動に貢献する。

ウ 本校実習船「眞山丸（１９ｔ）」を活用し、海洋観測及び生物調査を行い、秋田県沿岸海域の状況を把握する。

③ 未利用資源の有効活用に関する研究を通してのスペシャリストの育成

ア ハタハタは卵を孕んだ雌魚や大型魚は重宝されるが、小型のものや雄魚は食用

に利用されるものは少なく、投棄されるものも少なくない。これらを加工し貴重な水産資源として有効利用する方法を研究し、製品化を目指す。

イ　秋田県では禁漁を余儀なくされるまでハタハタ資源が減少し、漁民の死活問題にまで発展したが、その後資源が回復し年間２０００トン以上の水揚げが可能になった。しかし、若者のハタハタ離れや消費の低迷によって魚価の下落が起こっている。ハタハタを原料とした若者向けの新製品や県外向けの商品を開発しながら、伝統的な「ハタハタずし」の改良にも取り組み消費拡大につながる新製品の開発を目指す。

ウ　小型のホッケ（通称「ロウソクボッケ」）や産業廃棄物となっているイワガキの貝殻を、水産加工品や食品添加物として利用することによって水産資源として有効利用する方法を研究し製品化する。

④　ハタハタ資源の増殖に関する研究を通してのスペシャリストの育成

１１月下旬から１２月下旬にかけて短期間のうちに膨大な量のブリコが海岸に打ち寄せられるが、乾燥してしまうかあるいは海鳥の餌となり、尊い資源が失われている。海岸に打ち上げられたブリコを管理飼育することによりハタハタ資源の増殖を目指す。

⑤　地域活性化への取り組みを通してしてのスペシャリストの育成

ア　平成１８年度から実施してきた「チャレンジショップ」の成果をもとに、男鹿市や男鹿市商工会、男鹿市民等と情報を共有し、水産加工品の開発や利用法の研究を行い、「観光都市男鹿」の地域活性化を目指す。そのために、水産製品開発、宣伝広告、イベントの企画・運営等について、生徒が主体的に活動し、地域と有機的に連携する。

イ　高校生や男鹿市民を対象とした「料理コンクール」や「料理講習会」を開催し、新しい情報を男鹿市民とともに共有できる「アンテナショップ」を企画する。また、漁業協同組合婦人部の協力を得ながら新しい調理法や新製品の特産化を目指す。

ウ　「アンテナショップ」や研究発表会を通して、活動や研究の成果を地域に発信し共有するために、成果の普及を目指す。

⑥　資格取得への取り組みをとおしてのスペシャリストの育成

潜水技術検定、エンジン技術検定、食品技能検定等の従来から取り組んでいる各種検定の他に、漁業技術検定や水産海洋技術検定への取り組みを研究し、水産・海洋に関する興味、関心、知識の伸長を図ることによって、水産海洋のスペシャリストの育成を目指す。

（３）目標

①　研究成果をまとめ、研究発表や小中学校での出前講座を実施する。

②　ハタハタ選別機を製作し、実用化を目指す。

③　藻場や海底地形の調査を行い、ハタハタ産卵場の環境改善・保全に役立てる資料を得る。

④　未利用ハタハタ資源や他の未利用水産資源を利用した試作品を製造し、商品化する。

⑤　海岸に打ち上げられたブリコを採集し、海中で飼育する方法および陸上水槽で人工飼育する方法での種苗生産技術の開発を開発する。

⑥　アンテナショップを秋田県全域への情報発信基地へと成長させる。

5　調査研究の実施方法

（１）自動ハタハタ選別機の製作

得意とする機関に関する技術を生かして、ハタハタを雌雄あるいは大小に分別する選別機を製作し、実用化を目指す。

（２）潜水技術等を生かした地域に貢献できるスペシャリストの育成

男鹿半島周辺の日本海沿岸はハタハタ産卵場として重要である。ハタハタ資源減少の原因に産卵場となる藻場の喪失が一因として考えられる。ダイビング技術を活用し、人工網や貝殻を利用した藻場の再生方法を研究する。

（３）ハタハタの基礎的生態の研究

ハタハタの生態については、不明な部分が多い。男鹿水族館ＧＡＯと連携し、飼育下における生態を観察し、生態を明らかにしていく。

（４）ハタハタ資源の増殖に関する研究

１１月下旬から１２月下旬にかけて短期間のうちに膨大な量のブリコが海岸に打ち寄せられるが、乾燥してしまうかあるいは海鳥の餌となり、尊い資源が失われている。海岸に打ち上げられたブリコを管理飼育することによりハタハタ資源の増殖を目指す。

（５）未利用資源の有効活用に関する研究

①　秋田県の県の魚であるハタハタは「ブリコ」（卵）を孕んだ大型の雌魚は重宝されるが、「白子」はあまり見向きもされず、小型の雄魚は投棄されるものも少なくない。これらの小型魚や雄魚を水産資源として商品化する。

②　ハタハタは資源は回復したが、若者のハタハタ離れや消費の減少により、魚価の低迷が続いている。若者や秋田県以外の人にも好まれる加工品を開発し、消費の拡大・販路の拡大に結びつける。

③　秋田県はサザエや岩カキ（天然カキ）の産地でもあるが、その殻は無造作に廃棄されるのが一般的である。サザエやカキの貝殻の海洋投棄を防ぎ有効利用する方法を研究し、実用化を目指す。

6　長期計画

１年次	①外部講師による講演会 ②飼育下におけるハタハタの生態観察 ③男鹿半島の藻場の調査 ④ハタハタ選別機の設計 ⑤未利用資源の実態調査と有効活用の研究 ⑥アンテナショップの企画検討 ⑦学校、研究機関、地域等における研究報告会
２年次	①外部講師による講演会 ②飼育下におけるハタハタの生態観察 ③男鹿半島の藻場の調査と再生方法の研究 ④ハタハタ選別機の試作 ⑤未利用資源の有効活用法及び試作品の発表 ⑥アンテナショップの新企画の導入 ⑦学校、研究機関、地域等における研究報告会
	①男鹿半島の藻場の調査と再生再生方法のまとめ ②ハタハタの生態調査と報告

３年次	③未利用資源の有効活用の研究報告と試作品の発表会 ④ハタハタ選別機の完成・発表会 ⑤アンテナショップの充実 ⑥学校、研究機関、地域等における研究報告会

7　研究組織

（１）研究組織の概要

校内分掌に「研究指定校推進（目指スペ）委員会」を設置し、水産科を中心に全校体制で研究に取り組む。また、秋田県農林水産技術センター水産振興センターには全面的な指導を要請する。

（２）運営指導委員会

氏　　名	所属・職名	
工　藤　裕　紀	秋田県農林水産技術センター水産振興センター所長	委員長
林　　信太郎	国立大学法人秋田大学・教授	委　員
山　本　春　司	男鹿市産業建設部観光商工課長	委　員
伊　藤　俊　悦	秋田県漁業協同組合船川総括支所長	委　員
畠　山　直　美	漁業者・前ＰＴＡ副会長	委　員
渡　辺　　勉	秋田県教育委員会・指導主事	委　員
工　藤　正　孝	秋田県立男鹿海洋高等学校・校長	委　員
加　藤　竜　悦	秋田県立男鹿海洋高等学校・教頭	委　員

（３）校内における体制

目指せ　スペシャリスト推進委員会

氏　　名	職　　名	役割分担・担当教科
加　藤　竜　悦	教　　頭	研究指定推進（目指スペ）委員会委員長：理科
畠　山　浩　樹	教　　諭	副委員長（総括）：水産科代表
船　木　和　則	教　　諭	研究副主任：水産
船　木　英　也	教　　諭	研究副主任：海洋環境科長
奥　田　勝　秋	教　　諭	：水産
佐　藤　　茂	教　　諭	：水産
加賀谷　富　男	教　　諭	：水産
渡　辺　　薫	教　　諭	：水産
鎌　田　　亨	教　　諭	：水産
猿　田　英　幸	教　　諭	：水産
山　科　あさか	教　　諭	：家庭
柏　谷　亜紀子	教　　諭	：商業・情報
岩　谷　裕　次	教　　諭	：水産
鎌　田　美津子	教　　諭	：水産
大　高　英　俊	教　　諭	：水産・情報
三　浦　誠　一	実習助手	：水産
鈴　木　　元	実習助手	：水産
江　畑　邦　彦	実習助手	：水産
塚　本　誠　進	実習助手	：水産

三　浦　健　吾	実習助手	：水産
三　浦　幹　夫	臨時実習助手	：水産
松　山　大志郎	臨時実習助手	：水産
杉　沢　　卓	事務長補佐	：会計担当

8　実施の効果とその評価

研究を推進するにあたり、学科の特性を活かした水産教育分野、これからの時代に必要な環境教育分野、若い世代からとらえた起業家精神教育分野に分け、生徒の専門性の深化を図ることにした。

［水産教育分野」

（１）ハタハタ選別機制作班

魚の大・小、雄雌を選別するため設計・試作・改良へと進んだが、その精度はまだまだ手作業の方が早い。だが、生徒は「ものづくり」の難しさと楽しさを知るとともに、地域からの期待度が高いことが自信へとつながった。

（２）３Ｄ制作班

「男鹿の海」の中を疑似体験できるようにハタハタをはじめ海の生物を３Ｄで制作し表現した。アイデアや想像力が豊かになり、考える力もつき、パソコンも応用機能が使えるようになった。

（３）生態研究班

飼育の難しさと楽しさを学んだ。ハタハタの人工授精・稚魚放流の体験により、栽培漁業への関心・意欲が高まり、教員も種苗生産についての知識を得るため積極的に水産振興センターとの交流を深めた。また、ハタハタ検定問題を作成しホームページに掲載した。一週間で三十五件というペースでアクセスがあり、予想以上の効果が伺えた。

「環境教育分野」

（１）資源増殖班

海岸に漂着する卵塊を少なくするため、人工海藻を製作し海に設置した。波の力に耐えることは克服したが、その構造や設置場所については、まだまだ研究・調査していくことが必要である。

（２）未利用水産物活用班

「カメノテ」・「フジツボ」の殻が水質浄化に役立つことを突き止めた。その成果が、生徒の研究を遂行する忍耐強さにつながった。また、「ワカメの茎」についても研究を行い、その茎を利用したスイーツが指導委員から好評であった。

［起業家精神教育分野］

（１）新商品開発班

ハタハタの消費量拡大を目標に、若い世代をターゲットにしたハタハタを使った餃子とハンバーグを開発した。さらに、ハタハタ弁当や押し寿司などの試作・改良を行った。外部からの助言によりハタハタ特有の「生臭み」を消すヒントを得たことは大きな成果であった。ハタハタハンバーグは、冷凍保存できる利点があり、県内製造業者への売り込みが今後の課題である。

（２）起業家精神育成班

普通科Ⅱ類の生徒が中心である。本校のサバ缶を販売するために必要なビジネスマナーや方法を能代商業高校と連携することによって共有できた。生徒は「販売」することの難しさを実感していた。

９　最後に

今年度で事業は終了するが、生徒・職員・地域の方々へのアンケート調査によると「継続していくべき」との回答がほぼ百％という結果が得られた。生徒たちの探求心や豊かな表現力が身に付いたことは言うまでもないが、この事業を通じて研究機関や漁業者そして企業の人たちと接していくことで「地域の教育力」が発揮され、本県が推進する学校共通実践課題「ふるさと教育の推進」が「問いを発する子ども(生徒)」を育むことを確信できたことも収穫である。

Ⅴ　参考資料

平成２３年度
第１回校内職員研修

秋田県立男鹿海洋高等学校
教諭　船木和則

出典：「平成２３年度教職員等中央研修」
日本女子大学　教授　坂田　仰氏　資料
ＦＲ教育臨床研究所　所長　花輪敏男氏　資料
早稲田大学教育・総合科学学術員　心理学博士　河村茂雄氏　資料

第1回校内職員研修　平成23年7月19日(火)15:00～
場所:実習棟情報処理室

1　不登校の権利

2　季節の変わり目

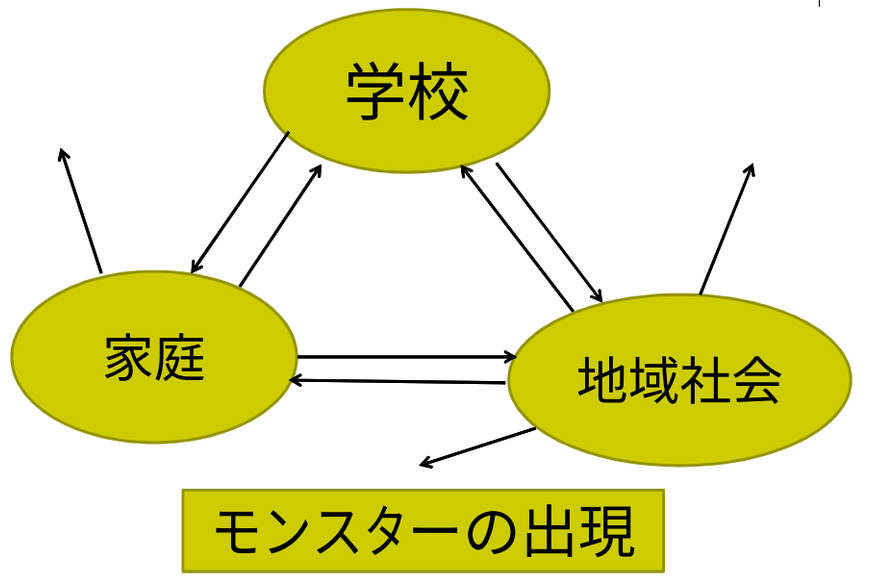
3　演習①　疑似体験

4　居場所がない！(アセスメントとアプローチ)
　Q-U法、自尊感情尺度の紹介　etc

5　演習②
　　Incident processによるcase study

◆教育法規Ⅰ

1　学校を取り巻く環境



2　三つのモンスター

①モンスターペアレント

②モンスターレジデント

③モンスターティーチャー

資料1

話してもわからない人の存在

わかりあえない！！

「不登校の権利」の主張

ＯＮとＯＦＦ
地公法第３３条
信用失墜の行為

◆特別支援教育

センター試験

・発達障害者に対して

「特別な配慮を」をすること。

→　高校における具体的な実践が前提

発達障害とは

・教育の世界では、ＬＤ、ＡＤＨＤ、高機能自閉症（アスペルガー症候群含む）を指すと考えてよい。

↓

脳の機能障害

生育・環境ではない。
（親のしつけが悪いのではない。）

・全国調査　小1～中3　通常の学級に6．3％

資料1

実は・・・・

どこにでもいる生徒

↓

発達障害の可能性

成人になって

・発達障害は昔から存在していた。

→　二次障害に陥りやすい。

→　社会的に成功している例

・「その子が分かりやすいように」

・長所を伸ばす。

資料1

有名人

・レオナルド・ダヴィンチ
・エジソン
・トム・クルーズ
・ビル・ゲイツ
・マイケル・フェルプス

診断と支援

・障害の状態はグラデーション

・教育の世界では
診断名が付こうが付くまいが支援していく
傾向があるなら、その障害に対する方法は
「有効であろう」と考える

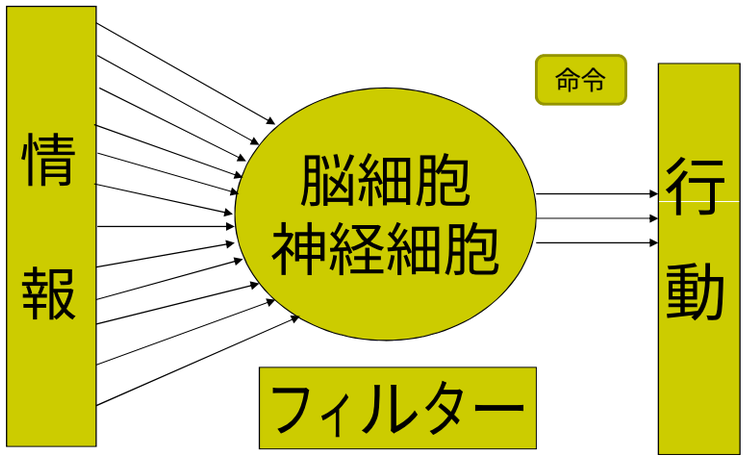
資料1

理解するキーワード

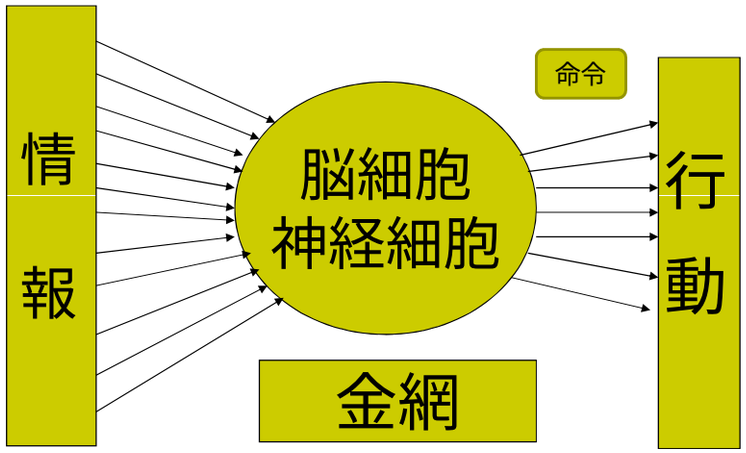
わたしもＡＤＨＤ　あなたもＡＤＨＤ

受け入れる学校･社会をつくる

健常者の場合



支援を要する人の場合



演習①

例1

十　口　→　　田

例2

十日十日→　車

支援を要する生徒はこんなふうに理解します。

資料2

◆生徒指導
日米の学校教育の構造

〈アメリカ〉

学習指導
教師

ガイダンス
SC

〈日本〉

学習指導
教師

ガイダンス
教師

育てるカウンセリングと育てる生徒指導

カウンセリング界

セラピー（治す）
問題解決カウンセリング

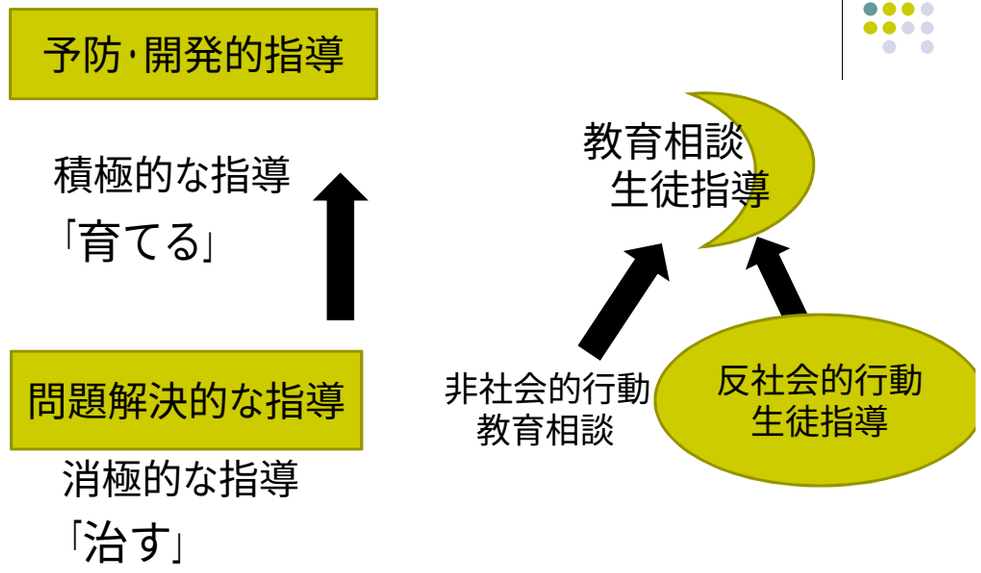
ディベロップメント（育てる）
予防開発的カウンセリング

生徒指導分野

リアクティブ（治す）
問題解決的生徒指導

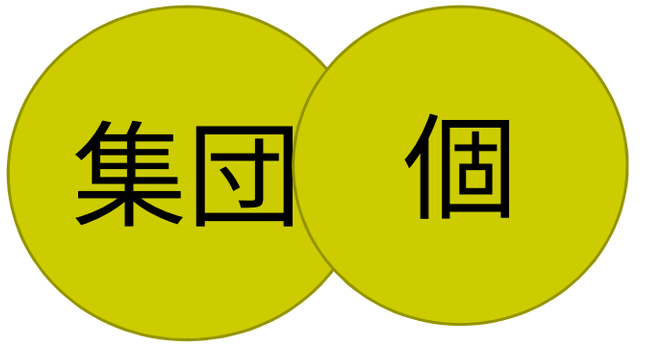
プロアクティブ（育てる）
予防開発的生徒指導

教育相談と生徒指導


予防･開発的指導
積極的な指導
「育てる」
問題解決的な指導
消極的な指導
「治す」
教育相談
生徒指導
非社会的行動
教育相談
反社会的行動
生徒指導

育てるカウンセリングを実践するときの二つの視点

(1) 第1の視点：個と集団



木も見る
森も見る

バランスよく

(2) 第二の視点：アセスメントとアプローチ

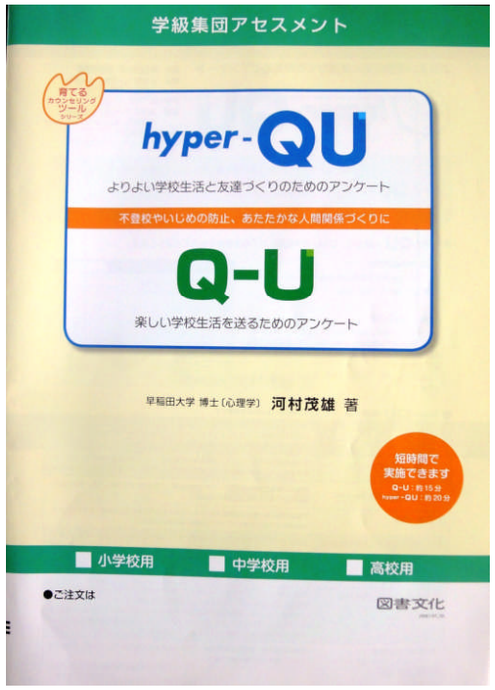
すべての教育活動において

アセスメント（診断的評価）

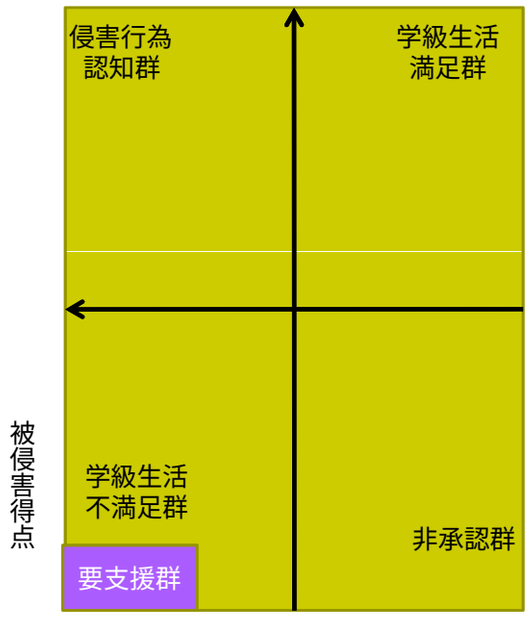
→

アプローチ　指導方法

グループ･アセスメントの紹介



学級診断テスト（Questionaire－Utilities）



資料1

パーソナル･アセスメントの紹介

「Child Rating Scale日本語版」「基本的信頼感尺度」「自尊感情尺度」の3つの尺度から構成されている。

資料3－1、3－2、3－3

演習②

Incident processによるcase study

事例提供者の報告

資料4

まとめ

1　学級集団と個の把握
2　否定形の命令は伝わらない。
3　文章は第一人称現在進行形で書かせる。

教育こそ最大の治療なり

平成２３年度
第１回校内職員研修

資料１

出典：「平成２３年度教職員等中央研修」
日本女子大学　教授　坂田　仰氏　資料
ＦＲ教育臨床研究所　所長　花輪敏男氏　資料
早稲田大学教育・総合科学学術員　心理学博士　河村茂雄氏　資料

◆教育法規Ⅰ

モンスターペアレント

女性教員刺殺損害賠償請求訴訟
（宇都宮地方裁判所平成１６年9月１５日判決）

一部認容→･･･義務教育課程を終えていない中学1年生の少年であり、是非弁別能力等の責任能力は一応認められるにせよ、その程度は相当に低いものであるから、日常生活その他のあらゆる局面において親権者等の監督義務の広い監督、支配に服すべきである。その反射的効果として、低い責任能力しか持たない年少少年の監督義務者の監督義務としては、広範かつ重大な責任が課せられて然るべきである。

モンスターレジデント

クーラー騒音差し止め請求訴訟
（京都地方裁判所平成２０年９月１８日判決）

一部容認・・・騒音の侵入が違法というためには、被害の性質、程度、加害行為の公益性の有無、態様、回避可能性等を総合的に判断し、社会生活上、一般に受忍すべき限度を超えているといえることが必要
・騒音防止条例を適用した裁判所

モンスターティーチャー

初任者研修分限処分等無効確認訴訟
（那覇地方裁判所平成２１年3月１１日判決）

→棄却・・・条件附採用制度・・・選考の方法が、なお、職務を遂行する能力を完全に実証するとはいい難いことにかんがみ、試験等により一旦採用された職員の中に適格性を欠く者があるときは、その排除を容易にしようとする制度

学校教育紛争
教師個人の価値観と「職」との衝突

毛語録懲戒免職訴訟（広島高等裁判所昭和６０年５月３１日判決）

→控訴棄却　　中学生は、未だ十分な批判力を持たない年代であるから、教師の持っている思想・主義を常にそのまま教示できるとは限らず、おのずから一定の抑制を求められる。

伝習館訴訟（最高裁平成２年１月１８日判決）

→破棄自判　懲戒処分は、平素から庁内の事情に通暁し、職員の指揮監督の衝に当たる懲戒権者の裁量に任されているものというべき

君が代伴奏職務命令訴訟（最高裁平成１９年２月２７日）

個人の価値観にあわないと主張

→上告棄却　音楽専科教員にとって君が代の伴奏は通常の職務の範囲

学校事故

①部活動落雷事故国賠訴訟 (最高裁平成18年3月13日)
→破棄差し戻し 引率者兼監督の教諭には、落雷事故発生の危険が迫っていることを予見すべき注意義務が存在し、事故の発生を未然に防止すべき一般的な注意義務を負う。この義務は、教育現場における慣習・常識によって左右されない。

学校現場の常識ではなく、最新の科学的知見をフォローする義務

②体罰国賠訴訟(最高裁平成21年4月28日)

→破棄自判 その目的、態様、継続時間等から判断して、教員が児童に対して行うことが許される教育的指導の範囲を逸脱するものではない。

→「懲戒としての体罰」とは区別される。「指導としての有形力の行使」を肯定

学校文化への批判

①旅行命令簿非公開取り消し請求訴訟
　　(最高裁平成15年11月11日判決)
→情報公開制度は広く県民に情報を提供することを目的とする制度であり、公務員の職務の遂行に関する情報については、私事に関する情報が含まれる場合を除き、非公開情報にあたるとはいえない。

②研修不承認訴訟 (名古屋地方裁判所平成14年5月22日判決)
　自立的研修権の否定

　→教育公務員特例法　研修に対する校長の実質的判断権(事前･事後)を付与

◆特別支援教育

特別な教育的ニーズ

・ニーズは多種・多様

発達障害（関連する二次障害）

虐待　神経症　精神病　緘黙

脳の器質的障害

・とりあえず「発達障害」を窓口に

しっかりと対応できる体制の学校に

こんな生徒いませんか？

・知的に問題はないようだが、学力が低い。
・漢字が極端に苦手
・朗読が下手
・ノートをうまくとれない。
・極端な方向音痴
・手紙の宛名書きがうまくできない。

こんな生徒いませんか。

・忘れ物が多い。
・整理整頓ができない。
・落ち着きがない。
・すごいおしゃべりである。
・指名されていないのに発言してしまう。
・順番が待てない。
・ケアレスミスが多い。
・提出期限が守れない。

こんな生徒がいませんか。

- その場の空気が読めない。
- 他の生徒が興味を持たないようなことに興味があり、「自分だけの世界」を持っている。
- 周囲の人が困惑するようなことも、配慮しないで言ってしまう。
- こだわりが極端に強い。
- 言葉通りに受け止めてしまう。

こんな生徒がいませんか。

・いくら言い聞かせても分からない。
・通信簿や指導要録にいつも同じことが書かれている。
・本人が相当努力しているのに、効果が上がらない。
・何事もやる気が見られない。
・不登校　　非行　　・・・・・

発達障害の困難性

・状態が著しく変化する。
　場面、年齢等
・診断がまちまち
　年齢、医師等
・理解不足による介入の誤りが多い。
　養育、環境によるとの誤解
・二次障害に陥りやすい
　不登校、非行、いじめ、中途退学、学力不振等

二次障害

・調査、研究
　・「不登校」の３０％が発達障害
　・「非行」問題の背景に発達障害
・高校中途退学者のかなりの数が発達障害
・大多数が「いじめ」にあっている。
・感触として「ひきこもり」にあっている。
・感触として「ひきこもり」の６～７割が発達障害という研究者も

二次障害を生じる心理的な要因

- 低い自己評価
- 自分がどうすればよいか分からない困惑
- 自分へのあきらめ
- 自分の存在を否定する周囲への反発

二次障害として現れやすい行動

・すべてに対しての「やる気」の喪失
・怒りなどの情動の抑制がきかない。
・抑制しようとする意欲の喪失
・他人への強い不信感
・自分を認めようとしない周囲への反発
・社会的ルールへの強い反発
・自分の将来への悲観から自暴自棄な行動へ

二次障害

内向き　→　非社会的

外向き　→　反社会的

新しい視点

・生徒指導、教育相談の分野

・学習面、行動面で「気になる子」

「もしかして・・・・・発達障害があるかも」

成人になって

・発達障害は昔から存在していた。

→ 二次障害

→ 社会的に成功している例

・「その子が分かりやすいように」

・長所を伸ばす。

診断と支援

・障害の状態はグラデーション

・教育の世界では
診断名が付こうが付くまいが支援していく
傾向があるなら、その障害に対する方法は
「有効であろう」と考える

学級担任（授業者）がポイント

・専門機関の指導　　せいぜい週数時間
・生活の中核部分を大切に
　　教室における「特別な配慮」
　　６．３％　→　１％？
・情報は「個別的なかかわり」が主
・集団の中でどう実現していくか
・学級経営の専門性

学級経営・授業が基盤

・「違い」を受け入れる集団
・認め合い、助け合い、協力し合う集団

・分かる授業
・自ら進んで取り組む学習

支援のポイント

・刺激の影響を強く受ける。→調整が必要

・本人にとって分かりやすい説明や指示が必要

・構造化される必要

・「脳の問題」と「心理的な問題」

視覚的なものの利用

・視覚的なものは「手がかり」としやすい

・日本語の分からない外国人が見て分かるもの

スケジュール　　カード　　シール
自閉症用タイマー　　取扱説明書
ソーシャルストーリー　　コミック会話

授業

・問題解決型の学習は苦手
・「枠組み」があったほうが分かりやすい

・モジュール化
・構造化
・即時評価

◆生徒指導

日本の学級集団と欧米の学級集団

□欧米の学級集団－－機能体
　目的：学習指導
指導者が子どもに一定の知識・技能を教えていく

○日本の学級集団－－機能体／共同体
　目的：学習指導＋心の教育
子ども同士の学びあい、相互の交流を通して自ら
　体験学習していく。

自明視されてきた
日本の学校教育の特徴

◎児童･生徒は、固定されたメンバーで、最低1年間、同じ教室で、共同体的な集団生活･活動体験を行い、ながら、学習指導を受けていく。

◎教師が学習指導とガイダンス･生徒指導の両方を統合し行っていく。

↓

今、このシステムが揺らいでいる。

◇児童･生徒の斉一性の低下

理想の学級集団の構造

〈必要条件〉

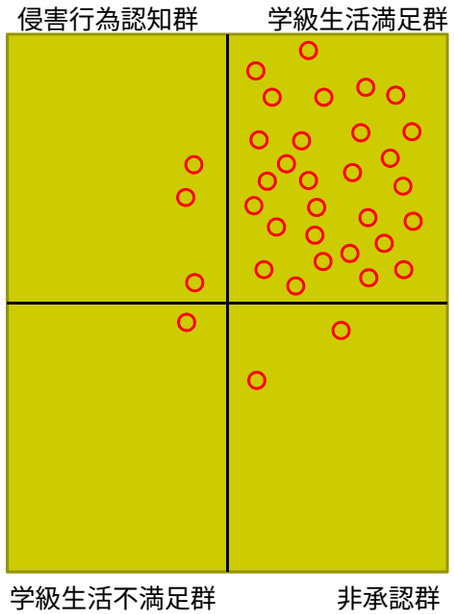
Ⅰ　集団内の規律、共有された行動様式　ルールの確立

Ⅱ　集団内の子ども同士の良好な人間関係、役割交流だけでは〈感情交流も含まれた内面的なかかわりを含む親和的な人間関係　〈リレーションの確立〉

Ⅲ　一人ひとりの子どもが学習や学級活動に積極的に取り組もうとする意欲と行動する習慣
同時に、子ども同士で学び合う姿勢と行動する習慣

Ⅳ　集団内に、子どもたちの中から自主的に活動しようとする意欲、行動するシステム

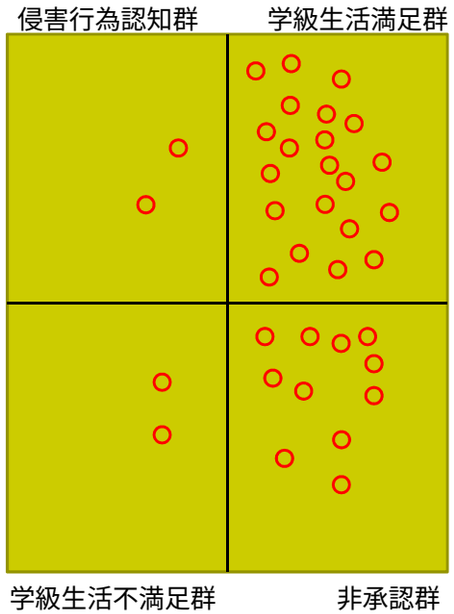
【満足型】



特徴

・学級の７０％以上が「学級生活満足群」に入っている。
・ルール、リレーションともに良好
【クラスの雰囲気】
・学級にルールが内在化しており、その中で、子どもたちは主体的に生き生きと活動している状態である。教師がいないときでも子どもたちだけで、ある程度の活動ができる。
・親和的な人間関係があり、子ども同士の関わり合いや発言が積極的である。学級全体に活気があり、笑いが絶えない学級である。

【管理型】



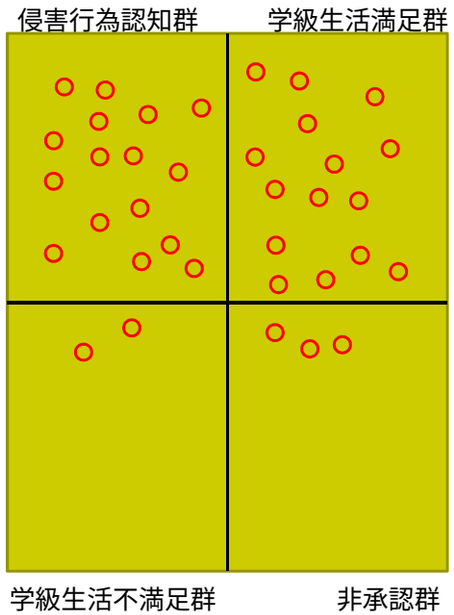
特徴

・学級の７０％以上が「学級生活満足群」と「非承認群」にいる。
・ルールを重視しているため、リレーションが不足。

【クラスの雰囲気】

・一見静かで落ち着いた学級に見えるが、学級生活を送る子どもたちの意欲には大きな差が見られ、人間関係が希薄である。
・教師の評価を気にする傾向にあり、子ども同士の関係にも距離がある。シラッとした活気のない状態で、学級活動が低調気味である。

【なれあい型】



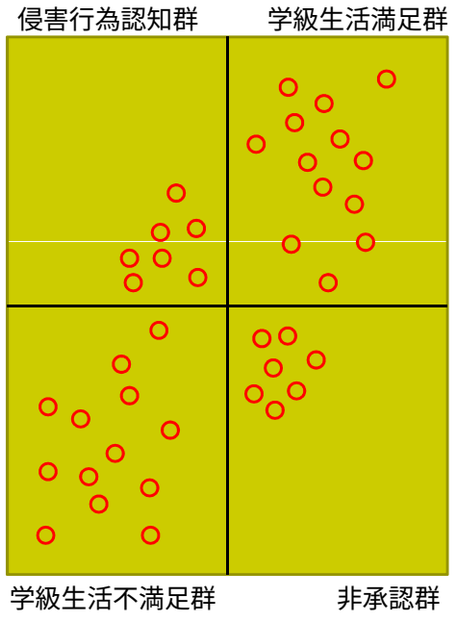
特徴

・学級の７０％以上が「学級生活満足群」と「侵害行為認知群」に入っている。
・リレーションはある程度あるが、ルールが不足。

【クラスの雰囲気】

・一見子どもたちが元気で自由にのびのびしている雰囲気の学級に見える。しかし、学級のルールが低下しており、授業では私語があったり、係活動の遂行に支障が出ている。
・子どもたちの間には小さなトラブルが頻発している、声の大きい子どもたちに、学級全体が牛耳られてしまう傾向がある。

【荒れ始め型】



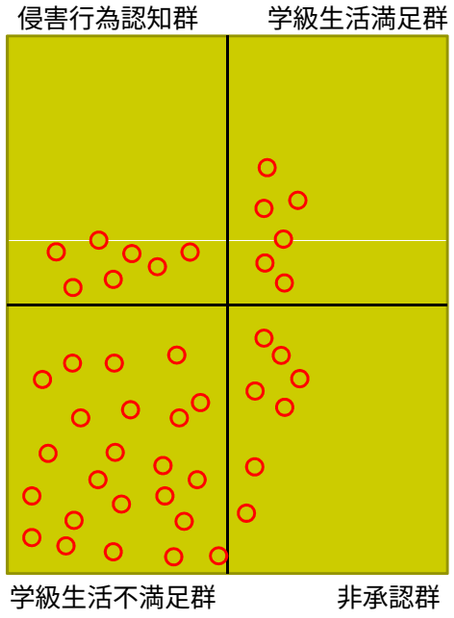
特徴

・学級の７０％以上が「学級生活満足群」と「学級生活不満足群」にいる。
・リレーションもルールも不足しはじめている。

【クラスの雰囲気】

・管理型、なれあい型の時に、具体的な対応がなされてないままいくとこの形になる。学級のプラス面が徐々に喪失し、マイナス面が現れてくる。
・このような状態になると、教師のリーダーシップは徐々に効を奏さなくなり、子どもたちの間では、お互いに傷つけ合う行動が目立ち始める。

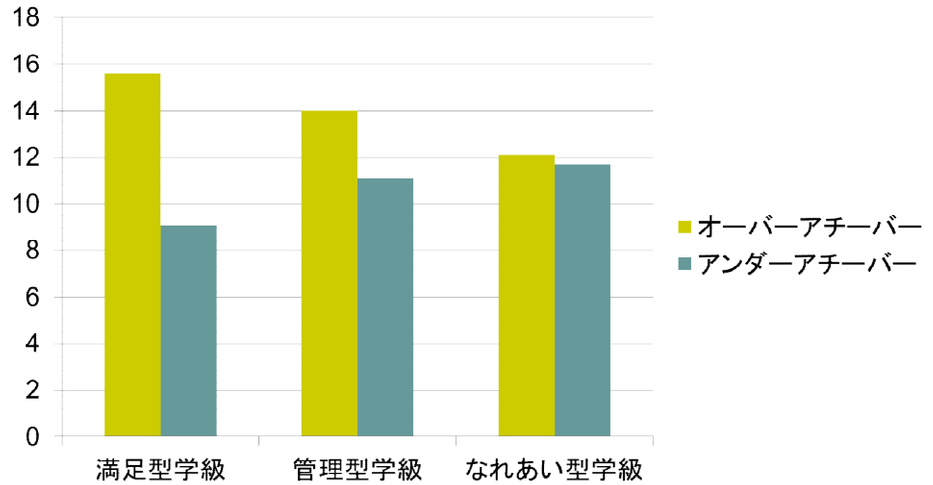
【崩壊型】



特徴

・学級の７０％以上が「学級生活不満足群」にいる。
・リレーションもルールもない状態
【クラスの雰囲気】
・すでに学級は教育的環境とはいえず、授業は成り立たなくなってくる。私語と逸脱行動が横行し、教師の指示に露骨に反発する子どもが出てくる。
・学級に集まることによって子どもたちは互いに傷つけ合うため、学級に所属していることに肯定的になれない。不満と不安で緊張しているため、不登校になる子どももいる。

学級集団と学力 (中学校)



OAとUAの出現率 (中学校)

学級集団の発達の考え方

・2人組→4人組→小集団→中集団→学級全体へ

学級集団の発達ーー子どもたちをつなぐものは何か。

集団内の人間関係　or　共有されたルール

or　他の集団との対立

◯学級崩壊の状態にある学級は、小学校の8．9％にのぼっている。ーー全国連合小学校長会（2006）ーー

教師が学級づくりに取り組む流れ

①日本の学級集団の理解と学級づくりの方法論を確認する。

②担任する学級に集うすべての子どもたちの支援レベルと、学級集団の現状の状態・集団発達過程の段階のアセスメントを適切に行う。

③現状の段階をより発達させるための集団育成の方針を定め、そのもとで具体的に席順や生活班などの日常の学級生活面、授業の展開、学級活動への取り組みを有機的に典型する。

④2，3ヶ月たったら再び②のアセスメントをし、③の方針を修正しながら取り組みを続ける。

第2回校内職員研修

学校におけるＳＷＯＴ分析

出典：平成23年度教員等中央研修資料

今日のキーコンピテンシー

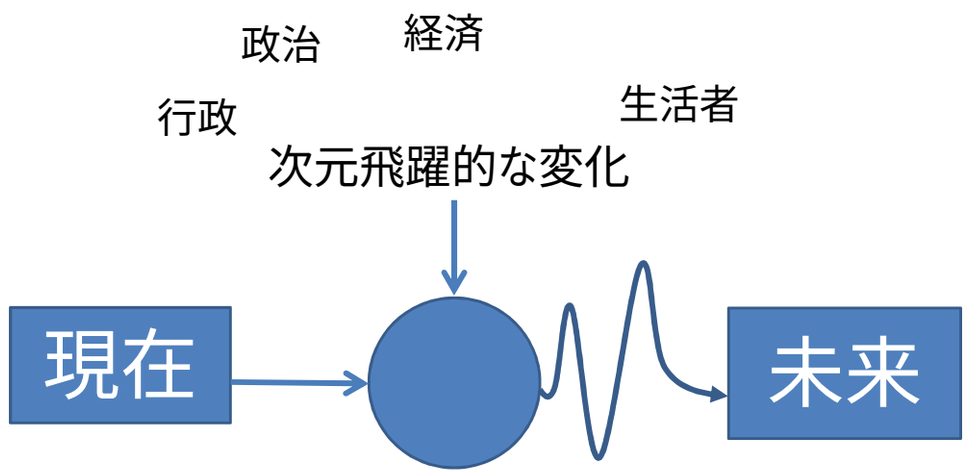
1　講義

① 適度なフラット組織化
② 人は状況を理解してこそ動く。
③ ミクロ環境で見る。
④ ＫＦＳの明確化

2　演習

① ブレインライティング法
② グルーピング
③ 概念化シート作成
④ グループ代表者発表

1　学校を取り巻く環境と変化の方向性

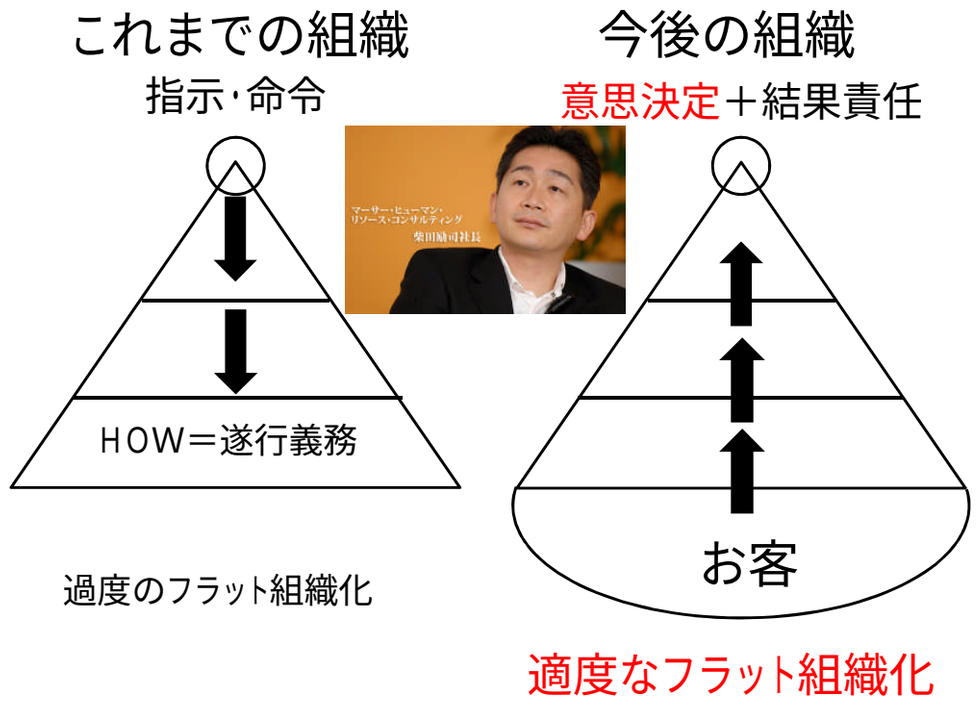


社会的枠組みの崩壊と再構築の過程

第1列島線（南沙・中沙・東沙）
メタンハイドレード
2020年までに空母機
動部隊3つを配置する
第2列島線
韓国
台湾
マカオ香港
西沙諸島
フィリピン
南沙諸島
北マリアナ諸島
グアム
© 2011 Europa Technologies
US Dept of State Geographer

日本企業の戦略展開の方向と新たな枠組み

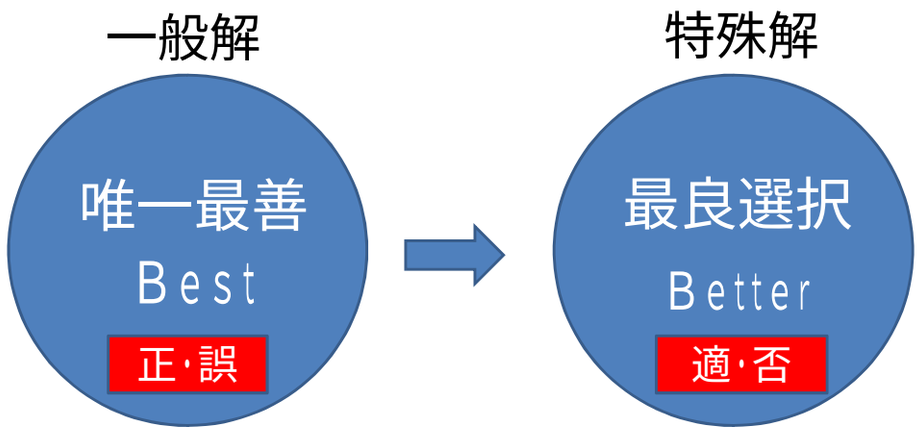
	これまでの考え方や取り組み	今後の考え方や取り組み
組織構造	・階層的ピラミッド ・大きな本社 ・安定的官僚制構造	・階層を削減したフラットな構造 ・小さな本社 ・ネットワーク構造
意思決定	・ﾎﾞﾄﾑｱｯﾌﾟ型意思決定 ・戦術課題中心の意思決定 ・安定的官僚制構造	・トップダウン・ボトムアップな構造 ・戦略的な意思決定
システム	・終身雇用 ・年功制 ・情報・パワーの集中(集権)	・実力主義 ・情報・パワーの分散(分権)


これまでの組織
指示･命令
HOW＝遂行義務
過度のフラット組織化
今後の組織
意思決定＋結果責任
お客
適度なフラット組織化
マーサー・ヒューマン・
リソース・コンサルティング
柴田勝司社長

2　環境変化に対応するマネジメントの考え方

マネジメントとは、何か？

おかれた環境の中で「こと」を「うまく成し遂げる」こと

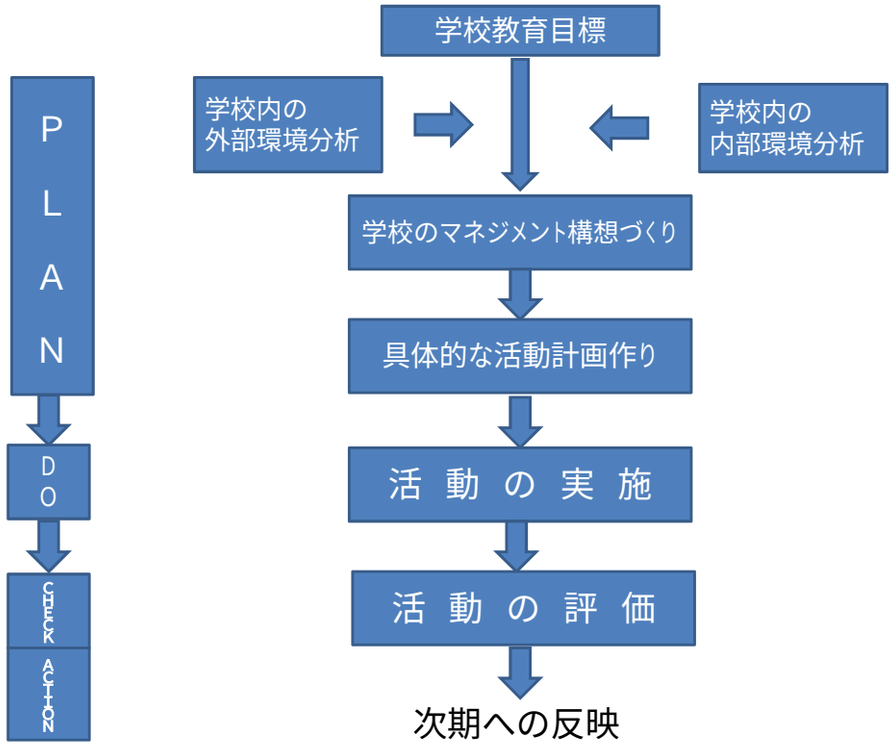


他校でうまくいったから、自校でうまくいくとは限らない。

マネジメントの有効性を支える3つのポイント

的確な環境状況の解釈とビジョンづくり	×	効果的なマネジメントのしくみの設計と活動の計画化	×	運用の努力とうまさ
(WHY)		(WHAT)		(HOW)
↓		↓		
根拠		主張		

人は状況を理解してこそ動く。


学校教育目標
学校内の
外部環境分析
学校内の
内部環境分析
学校のマネジメント構想づくり
具体的な活動計画作り
活 動 の 実 施
活 動 の 評 価
次期への反映
P
L
A
N
D
O
CHECK
ACTION

3　SWOT分析

[外部環境]	[内部環境]
(＋) 機会 (Opportunity)	(＋) 強み (Strength)
(－) 脅威 (Threat)	(－) 弱み (Weakness)

学校におけるＳＷＯＴ分析

外部環境	内部環境
（＋） 支援的に働く場合	（＋） 強み
（－） 阻害的に働く場合	（－） 弱み

マクロではなく、ミクロ環境で見る

外部環境を分析する視点

分析項目	分析項目の内容（例）
歴史・文化	・地域にある史跡・名勝・天然記念物 ・地域の行事・催事 ・地域間の交流とその特徴 ・町おこし・村おこし
自然・風土	・地勢・地形の特徴と特性 ・気象・気候の特徴
産業	・産業 ・地元との関係 ・規模・立地 ・地場産業
保護者	・経済状態 ・世代・年齢 ・価値観・考え方
地域住民	・転出・転入 ・学校への印象方
関係機関	・教育委員会 ・同窓会・保護者会

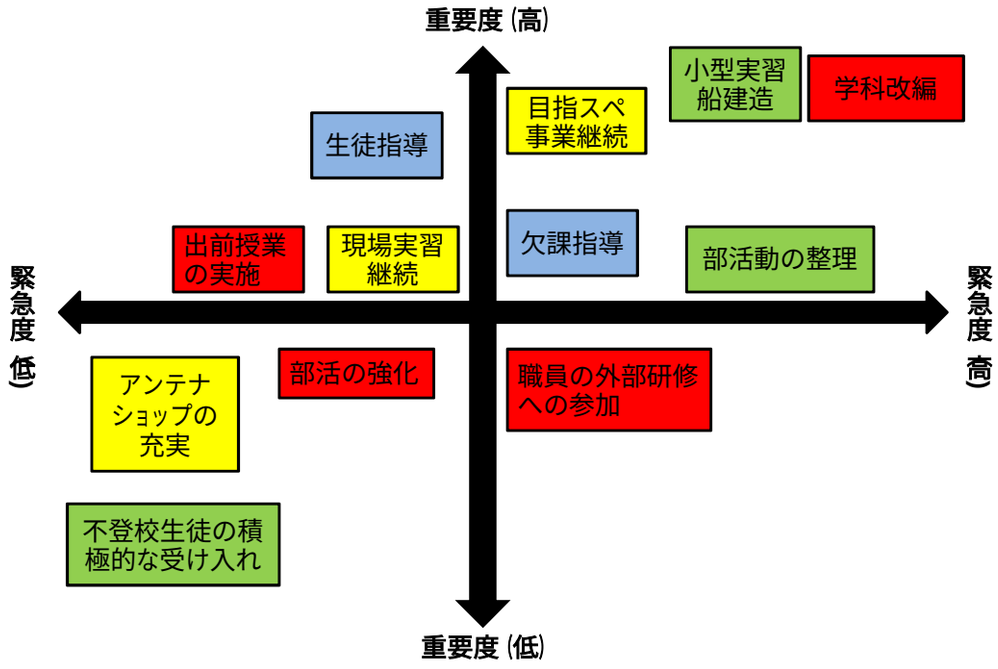
内部環境を分析する視点

視点	分析項目	分析項目の内容（例）
ヒューマンウェア	生徒	・学習面・生活・特別活動
	管理職	・得意領域・経験・人的ネットワーク
	教職員	・得意領域・経験・人的ネットワーク
ハードウェア	施設面	・校舎・パソコン・グランド・プール等
	設備面	・パソコン教室・教具・教材等
	予算面	・研究指定・販売収入等
ソフトウェア	システム面	・職員会議・校務分掌・学校運営システム
	ノウハウ面	・教科内容・カリキュラム教育方法・生徒指導のノウハウ・授業研究のノウハウ等・学校の保有しているノウハウ
	組織・文化面	・校風や伝統、学校の職場の雰囲気等

4　SWOT分析のプロセス

1　機会の探索
2　機会に合致した強みの抽出
3　強みの積極的活用
4　弱みを強みに変換
5　弱みの克服（改善・強化）
6　脅威に対する対応策の検討
7　成功要因（ＫＦＳ）の明確化

重点課題の明確化（例）


重要度（高）
小型実習船建造
学科改編
目指スペ事業継続
生徒指導
出前授業の実施
現場実習継続
欠課指導
部活動の整理
緊急度（低）
緊急度（高）
アンテナショップの充実
部活の強化
職員の外部研修への参加
不登校生徒の積極的な受け入れ
重要度（低）

校内で活用するには・・・・・・・・

①校長あるいは教頭になったつもりで学校
全体を分析してみる。

その他の手法
ア　組織マネジメント手法　　イ　職場診断法
ウ　ミッションマネジメント手法　エ　職場活性化手法

②クラス、学年部、科、教科、校務分掌等で
分析してみる。

その他の手法(市場細分化手法)
分析項目
ア　地理学的変数によるセグメンテーション
イ　人口統計的変数によるセグメンテーション
ウ　心理学的変数によるセグメンテーション
エ　行動科学的変数によるセグメンテーション

演習からまとめまでの流れ

① ブレインライティング法でアイディアを出します。

⬇

② 各自出したアイディアを模造紙にグルーピングします。

⬇

③ 班ごとに概念化シートを完成させます。

⬇

④ グループの代表者が発表します。

ブレインライティング法の進め方

ルール1

1枚の付箋に1つアイディアを横書きし、3枚貼る。

ルール2

時間はきちんと守る。

ルール3

前の人のアイデアを見て、自分のアイデアを書く。

ルール4

否定的なことは書かない。

↓

理想の学校像を描いてもらう

演習シート

テーマ：活気のある学校にするためには

	A	B	C	
1 ⇩	階段教室が欲しい	生徒指導を厳しくする。	TTで習熟度別に授業をする。	3分間
2 ⇩	電子黒板、実物投影機がほしい。	放課後の巡回専門者を決める。	~~バカは入学させない。~~	3分間
3 ⇩	付箋の色にこだわらず、自由な発想で書く。			

第2回校内職員研修

学校におけるSWOT分析

出典：平成23年度教員等中央研修資料

今日のキーコンピテンシー

1　講義　30分

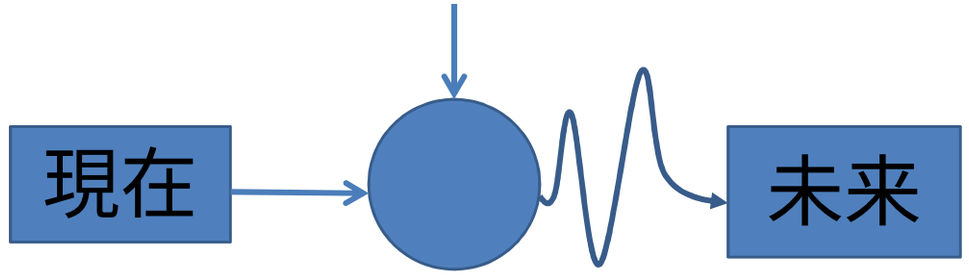
① 適度なフラット組織化
② 人は状況を理解してこそ動く。
③ ミクロ環境で見る。
④ ＫＦＳの明確化

2　演習

① ヒントは前の人！
② ブレインライティング法
③ 自分が校長
④ グループ代表者発表

1　学校を取り巻く環境と変化の方向性

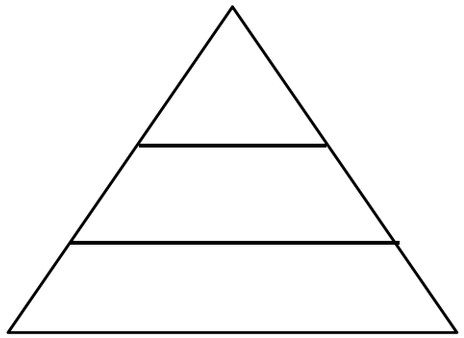
次元飛躍的な変化



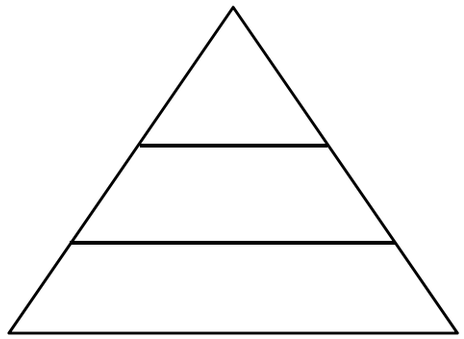
日本企業の戦略展開の方向と新たな枠組み

	これまでの考え方や取り組み	今後の考え方や取り組み
組織構造	・階層的ピラミッド ・大きな本社 ・安定的官僚制構造	・階層を削減したフラットな構造 ・小さな本社 ・ネットワーク構造
意思決定	・ﾎﾞﾄﾑｱｯﾌﾟ型意思決定 ・戦術課題中心の意思決定 ・安定的官僚制構造	・トップダウン・ボトムアップな構造 ・戦略的な意思決定
システム	・終身雇用 ・年功制 ・情報・パワーの集中(集権)	・実力主義 ・情報・パワーの分散(分権)

これまでの組織



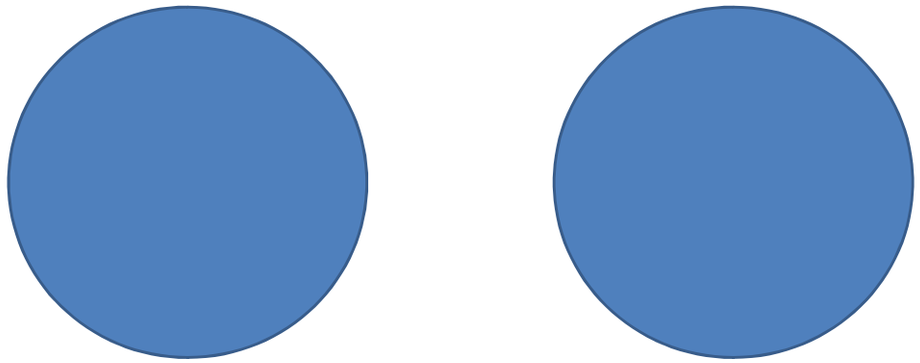
今後の組織



2　環境変化に対応するマネジメントの考え方

マネジメントとは、何か？

おかれた環境の中で「こと」を「うまく成し遂げる」こと

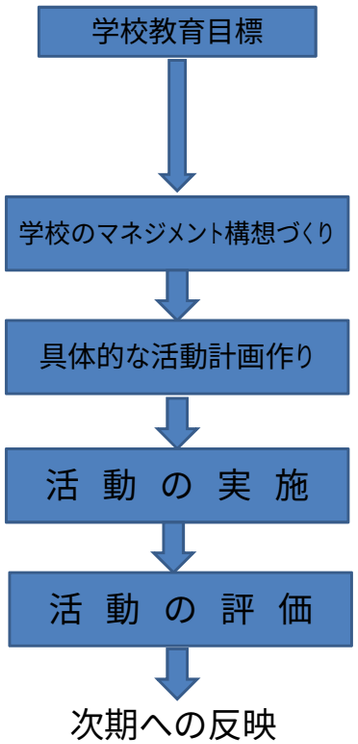


マネジメントの有効性を支える3つのポイント

的確な環境状況の解釈とビジョンづくり

効果的なマネジメントのしくみの設計と活動の計画化

運用の努力とうまさ


学校教育目標
学校のマネジメント構想づくり
具体的な活動計画作り
活 動 の 実 施
活 動 の 評 価
次期への反映

3　SWOT分析

[外部環境]	[内部環境]
(＋) 機会 (Opportunity)	(＋) 強み (Strength)
(－) 脅威 (Threat)	(－) 弱み (Weakness)

学校におけるＳＷＯＴ分析

外部環境	内部環境
（＋）	（＋） 強み
（－）	（－） 弱み

外部環境を分析する視点

分析項目	分析項目の内容（例）
歴史・文化	・地域にある史跡・名勝・天然記念物 ・地域の行事・催事 ・地域間の交流とその特徴 ・町おこし・村おこし
自然・風土	・地勢・地形の特徴と特性 ・気象・気候の特徴
産業	・産業 ・地元との関係 ・規模・立地 ・地場産業
保護者	・経済状態 ・世代・年齢 ・価値観・考え方
地域住民	・転出・転入 ・学校への印象方
関係機関	・教育委員会 ・同窓会・保護者会

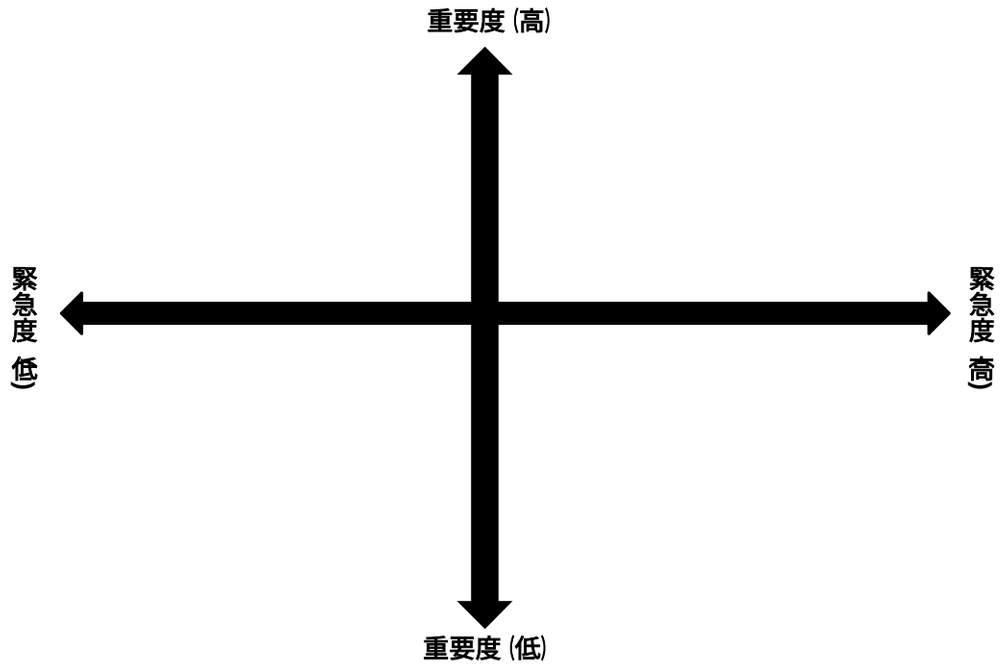
内部環境を分析する視点

視点	分析項目	分析項目の内容（例）
ヒューマンウェア	生徒	・学習面・生活・特別活動
	管理職	・得意領域・経験・人的ネットワーク
	教職員	・得意領域・経験・人的ネットワーク
ハードウェア	施設面	・校舎・パソコン・グランド・プール等
	設備面	・パソコン教室・教具・教材等
	予算面	・研究指定・販売収入等
ソフトウェア	システム面	・職員会議・校務分掌・学校運営システム
	ノウハウ面	・教科内容・カリキュラム教育方法・生徒指導のノウハウ・授業研究のノウハウ等・学校の保有しているノウハウ
	組織・文化面	・校風や伝統、学校の職場の雰囲気等

4　SWOT分析のプロセス

1　機会の探索
2　機会に合致した強みの抽出
3　強みの積極的活用
4　弱みを強みに変換
5　弱みの克服（改善・強化）
6　脅威に対する対応策の検討

重点課題の明確化



校内で活用するには・・・・・・・・

①校長あるいは教頭になったつもりで学校
全体を分析してみる。

その他の手法
ア　組織マネジメント手法　　イ　職場診断法
ウ　ミッションマネジメント手法　エ　職場活性化手法

②クラス、学年部、科、教科、校務分掌等で
分析してみる。

その他の手法(市場細分化手法)
分析項目
ア　地理学的変数によるセグメンテーション
イ　人口統計的変数によるセグメンテーション
ウ　心理学的変数によるセグメンテーション
エ　行動科学的変数によるセグメンテーション

編　集　後　記

今年度は記録的な豪雪であり、春の訪れが遅く感じられるこの３月に、本校の研究紀要第８号を発行することができました。今後の研修および教育活動に本紀要をお役立ていただければ幸いです。

最後に、ご多忙中にもかかわらず貴重な原稿をお寄せいただきました諸先生方に心より感謝申し上げます。

平成２４年３月発行
研究紀要　　第８号

編　集　　秋田県立男鹿海洋高等学校　研修部
発　行　　秋田県立男鹿海洋高等学校　研修部